

葛城野一言主

多田山公口祕稿

葛城野一言主の神事は、惡を善に、醜を美に、邪を正に化育する祕言靈にして「マガゴトモヒトコトヨゴトモヒトコトワレハカツラギノヒトコトヌシノカミノカミワザ」と傳承せるところなり。

人間世界の森羅萬象は善惡美醜正邪曲直の交錯變転にして、寸時も静止することなく生滅遷流しつづつあること、目睹するところの如くなり。

生滅して止まらず、變遷して息まず、流轉して安からず、錯綜して通ぜず、交易の時ならざる現象を判別し整理して正邪曲直善惡美醜を明瞭に知らしむる神徳を「カミ」と稱へて最大の天、最小の地なる絶對なり。

最大最小の天地を葛城野一言主と稱へまつるは神言靈（かみのことたま）にして、其の音義が如是の妙用を現する實相にして、如是の妙觀なるなれば、之

れを「カミ」と稱へまつるなり。

されば、「カミ」とは「カツラギノヒトコトヌシ」にてましますなり。

其の音義の妙用とは一音響の神徳にして、實相の照觀とは一圓相の妙音なり。

一圓一音の妙用を妙音觀世音なりと稱ふるは、即「カミ」なりとの義にして、印度佛教に云ふところの阿彌陀佛音なり。

日本民族傳承するところの神言靈に「マガゴトモヒトコトヨゴトモヒトコトワレハカツラギノヒトコトヌシノカミノカミワザ」と稱へまつるは即、阿彌陀佛音にして、此の生死遷轉の現象世界に在りて實相眞如の淨地を築き成すなる祕事なり。

之れを「アマノヌホコ」と稱へ「イザナギイザナミフタハシラノカミ」とまうじまつるなり。

「フタハシラ」とは二柱と古老が支那文字を充當てたる如く「マガゴトモヒトコト」「ヨゴトモヒトコト」の正反對なる二音響にして二圓相なり。

天地なり、陰陽なり、男女なり、雌雄なり、凹凸なり、美醜なり、善惡なり、正邪なり、曲

直なり、明闇なり、日月なり、ヒツギなり、ヒツギなり、天津日嗣なり、生死遷流にして天壤無窮なり、「イノチ」なり、命（みこと）なり、命（おほせ）なり。

而して神魔なり、神魔剖判して同凡に在るなり。

「ハハソハ」と名づけ「ソノトコソイヘ」と教へ給ふところなり。

古典に天地初發と云ひ、天地剖判・天地剖割・天地初判、又は天地別（カミワザ）と記載したるところにして、天浮橋を築けるものなり。

此の天浮橋にして天沼矛搔き鳴らし給ふとは「ミトノマガハヒ」にして、神人産出の祕事なり。

二圓相の合するにあらずして破（わ）るるなり。

割れ盡すなり。

割れ盡すが故に一切を合せたるなり、一切を捨つるが故に一切を有つなり。

之れを「チヨノイノチ」と稱へて命（みこと）無きの命（みこと）なり、「イノチ」無きの「イノチ」なり。

二音響二圓相の一音響と化り一圓相を現じたるなり。

一音響は即、一圓相なれども一圓相は一音響なるにはあらずとて、之れを非と云ひ、否と呼ぶは靈（ひ）にして、魂（ひ）にして、靈（ひ）にあらずして、魂（ひ）にあらずして、魂（ひ）にして、靈（ひ）にして一（ひ）なりとの義なり。

空にして空にあらず、空にあらずして空にして、空にあらずして空にあらざるなれば、極無極の日（ひ）にして、極大極小の火にして、無際無涯の一（ひ）にして、無宇宙の非（ひ）にして一圓一音にして、五重七重にして、宇宙無きの宇宙なれば、中心無きの中心にして、「カミ」にあらず「ヒツギ」にあらず、人にあらず、物にあらず、天地にあらず、陰陽にあらず、男女・雌雄・凹凸・美醜・善惡・正邪・曲直・明闇・日月等にはあらざるなれば、大宇宙となし大宇宙の大神中心と呼ぶべきか、非宇宙となし非宇宙の非中心と呼ぶべきか、無宇宙となし無宇宙の無

中心と呼ぶべきか。

皆共に完からざるを憾む。

幾何學に云ふところの點なれども、位置を示すと定義する時は既に當らず。

故に今假に大宇宙の大中心と呼ばん。

大宇宙の大中心とは一圓にして一音なれば、宇宙にあらず、宇宙の中心にもあらずして、宇宙を築き、宇宙の中心を成すなる一點にして「ヒ」なると共に「メ」なるなり。

之れを「ヒメ」の祕事となすなり。

「メ」とは母胎にして、女陰にして、国土にして、家にして磬境にして、神命なれば「イノチ」なり。

目なり、芽なり、女なり、命（いのち）なり、生死遷流なるなり。

故に「メ」とは「アマテラススメオホミカミ」にして、「ヒメ」とは「アマテラスオホミカミ」にてましますなり。

之れを「イスズヒメ」と称へまつるは「ヒメカミワザ」の「ヒメコトタマ」にして、「カミノコトタマ」なる極大極小の「ヒ」な

るなり。

「ヒメ」にして「ヒ」なるなり。

故に「イザナギノミコトイザナミノミコトフタハシラノカミ」と称へまつれば「大宇宙の大中心としてのカミ」なりとの義にして、「イザナギイザナミフタハシラノカミ」と称ふる時は「善惡美醜正邪曲直判別の神徳」との義にして、「イザナギノカミ」と称へまつるは「神界築成の神徳」との義なるなり。

其の然るは「カミノコトタマ」の然るなり。

人間造作の名称ならざるは固よりにして、人間歴史上の人身の身魂としての神徳なりとの義にもあらざること、また固よりなり。

されど、人間歴史上の人身としての身魂が「カミノコトタマ」としての神徳を顕彰すること、また固より當然の事理なるなり。さればとて、某甲の死後、其の身魂が「イザナギノカミ」にして、或は「アマテラスオホミカミ」にして、亦は「カツラギヌシノカミ」にして、又或は「ニギノミコト」にてましますと

云ふにはあらざるなり。

人身としての身魂が大宇宙の大中心に歸入したる時は、生死を隔てずして直に「カミ」たるの御徳を顕彰するが故に、「イザナギノカミ」たり、「アマテラスカミ」たり、「アメノミナカヌシノカミ」たり、「カツラギヌシノカミ」たり、「ニギノミコト」たること、一音琅琅として邊際無く一圓晃耀として極無極なるなり。

されば「カミ」は「ミコト」と成り得たる一切の神徳にして即、八百萬神なるなり。然れども「一神が萬神を顕はす」とか「萬神は一神に歸す」とか云ふが如きものにてはなきなり。

「ミコトの神徳は一多を總べて餘すところ無し」と雖、一神にあらず、萬神にあらずして「カミ」たるなり。

「カミ」は「カミ」にして他の何にてもなきなり。即、大宇宙の大中心としての「ミノリ」なるなり。之れを神命なり、「ミコト」

なりとなすなり。

「天津神の命（おほせ）」と古典に載せたるは此の義なれども「天津神國津神の命（おほせ）」とか「天地（あめつち）の神の命（おほせ）」とか記すを正しとすべきなり。

省略の文法として通ずるなれども、後人殆悉く誤解して「天神諸命以」を、天津神の命（おほせ）以ちてと讀み得ざるに至れるなり。

「天地（あめつち）の神（かみ）の命（おほせ）」とは「イノチ」にして、「天壤無窮」にして、別れては「カミ」たり、合しては「ヒト」たり、別れて合ひては「ミコト」たり。

「カミ」とは「ヒ」にして、「ヒト」とは「ヒビ」にして、「ミコト」とは「ヒミリ」にして「ヒ」なるなり。

「ヒミリにしてヒなり」とは極大極小の「ヒ」としての最大最小の活動なるなり。

其の最大最小の活動を天津神國津神の命（おほせ）と稱へまつりて、神命（しんめい）なるなり、命（いのち）なるなり、命（みこと）なるなり。

此の最小最大の點を「カミ」と稱へて「カツラギノヒトコトヌシ」にてましますなる「ヒメコトタマ」にして「カミノコトタマ」にして「カミコトタマ」にして「コトホギタマ」にして「ウタ」にして「ヒト」にして「ナホヒ」にして「オホナホヒ」にして「カムナホビ」にして「ナムナホビ」にして「ノリト」なるなり「ミコトノリ」なるなり。

「アアヒガテンジンユウアイコウ」と稱へまつるも、「トラカミエミタメ」と稱ふるも、「アマツヒコヒコホノニギノミコト」と稱へ、「アマテラシマシマススオホミカミ」と稱ふるも、「アメノミオヤアメユヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト」と稱ふるも、「ユクヒトノココロシレバカニカクニトクカヘリマセイツカシガモト」と稱ふるも皆共に神徳にして、神命にして「カミノコトタマ」なるなれば「ノリト」にして神の御名にてましますなり。

故に「カミ」と稱ふことは一なれども、御徳としては千變

萬化せる現象世界を統治し化育し給ふなり。

之れ人間身として窺ひ知るこ
と能はざるところなれば、「カ
ミ」の「ウケヒ」に依りて人生
を經綸したまふは、「カミ」の
爲し賜ふところにして、神人の
參與を命ぜらるるところなるな
り。

葛城一言主。

以上 昭和十年七月二十七日

書寫

ふさのうみさちこそきよれな
つやまのまさきのかつらふゆを
こそまで。

ささのくまひのくまがはにこ
まとめてしばしみづかへかげを
だにみむ。

うた

「ウタ」とは「カミ」なり。

今人の歌謡と呼ぶは、音楽な
り詩歌なりと稱して、人の感情
思想の一部を詠出するものなり
と定義を立て居れども、日本民
族伝承の「ウタ」とは、斯の如
き狹隘なる浅膚なる卑俗なる低
劣文芸を指したるにはあらざる
なり。

「ウタ」とは「カミ」なれば
「ノリト」なり。

「神言靈」にして「カツラギ
ノヒトコトヌシ」なれば、一音
響の示音なり、神音なり、妙音
なり、觀世音なり、妙音觀世音
なれば梵音なり、海潮音なり、
阿弥陀佛音なるなり。

日本民族は幸にして、許多の
「ノリト」を傳承せり。

今日之れを類別して後世子孫
に貽さんと欲す。

アチメ オオオ。

アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。

ウ。

ウウ。ウ。ト。ウト。ウ。

アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。

ウ。

ハルヒヒメハルヒヒメハルヒ
ヒメ。

ヒメ。

アチメアチメ オオオオオ。

ア。

ウ。

以上 昭和十年七月七日
大日本祓禊所 語部宮

アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。

はるさめのおとこそたたねく
さもきもどりいろますはるさ

めに。

春雨の音こそ立たね草も木も
綠色増す大和國原。

白百合の咲きたる宿に我れ遊
ぶ瀧のとどろく山の峽間に。

以上

「アチメ」とは、「アマノミナカヌシノオホミカミ」の妙境のこと

祭祀答問録(三)

多田雄三

「ミソギが活物であれば祭祀も活物でありませう。若し然なりとすれば、活物なる所以、及、活動の状態。

「此の「マ」と彼の「マ」とが抱合合体して新しき體を築く。それだから、祓禊と呼ぶも、祭祀と名づくるも共に等しく活物であり、それが直に活動の状態で、破壊しては建設し、建設しては破壊する。生まれては死に、死にてはまた生まれる。則、徹頭徹尾活動で、分秒の間と雖も止むことは無い。此の活動は、生死を超越して無始無終に無際限に活潑潑地に生死流転を展開して居る。然して、その到り着いたところは、大平等海なる「タカマノハラ」である。

問 祭祀の教は單なる倫理や道德ではないと思はれます。そこには救済があり、久遠の生命があるものと考へます。

答 人の道は斯くあるべしと標識を立てたのが倫理であり道德であるとすれば、それを超えて、つまり、時間と空間との限界を超越して、無始無終に無際限に流行流転する神律に随順して行はれるのが「マヅリ」である。故に、その行事は必や、久遠の生命に由るのであり、その結果は必や、彼岸に到達するのである。彼岸とは「タカマノハラ」で、それを圖に示せば○である。此の○は太平洋海だから固より久遠である。生死を超えたる「イノチ」である。之レを「アマノミナカヌシノオホミカミ」と称へまつる。

問 「原始反終」の語は祭祀を教へものでありませうか。

答 之れは易經の語。

始を原ね原ねて止まざれば、勿然として蹕裡脚下に在り。出でては入り往きては返る。天津金木の太歳通たる○象を悟證すべきである。經も無く緯も無く、始もなく終もなき妙境である。「アチメ」と呼び、「アマノミナカヌシノオホミカミ」と称へまつる。

フルコトフミ^フ 古事記日本書紀等に傳へたる此の神言と詩篇の言とを總合し翻譯すれば次の如くなるべし。

日神の神功成て眺望たれば。海も海にはあらず山とても山にてはなし。我れに仇するものは自斃れ。我れを虐げんと謀れるものは己が放てる矢にて胸をば射貫かれたり。見よ。ワギミの神^{カミノカミワサ} 事の何如に威烈しき^{オソロ}かを。

語を換へて云へば。

日月昭昭不^{トシテ}容^レ邪曲^ヲ。

天地默默萬類蕃息^{トシテ}。』

月明なる夜ではあるが、北方の山のあたりを眺むれば、紺青の色濃き中に、燦燦と星は光つて居る。ところが、不思議。我が顯魂鎮まるままに、我が幸魂躍るがままに、我が奇魂雄走るままに、我が眞魂の締り締りて、我が和魂澄み清みたれば、星も無く、月も無く、山も、水も、將、大空さへも、唯一圓の光と化^チりて、それがそのまま、森森羅羅、萬象萬物、出入往返。八百萬神は、歡喜勇躍。過去も、將來も、現在も、上も、下も、四維八隅も、一切合切が、皆唯、一點より出で、一點に歸り、一點に繋がる。功罪賞罰、隠るるに處無く、遁るるに途無し。奇なる哉。妙なる哉。此是死^シ矣。又是矢^ヤ矣。

古老は、之を讚嘆して、「阿知米」と稱へたのである。

昭和十九年四月十二日 東京都鷺宮祓禊所^{ミソギ}に在りて 多田雄三 山谷淨書

以上 第四章 終

死生觀の解説は、之で盡きて居る。けれども、本文は、なほ三分の二も有る。今、それを、第五章として、此

ウケヒとウケビとウケフミ

幸253頁で言う「^{カミヨ}神代の神」とは、^ヒ無宇宙の^{カミ}零の神のこと。

即ち、コトアマツカミとアマツカミの総称。言い換えると、

この宇宙(時間と空間)が始まる以前から(最初から)

存在していた神のことである。

また、「^{カミナガラ}雄神の神」とは、^ヒ零が^{カミナガラ}に(大宇宙の

^{オホセ}大中心の^あ命のままだに)結ばれて生れましたウニツカミのこと。

^{ヒト}「^ミ日止の身」であっても、^{カミナガラ}にウケフミ行けば、

『^{ウケヒ}神の^よ宇気地^{ウケビ}に依りて、神の^{ウケビ}宇気毘を得る』ことができる。

即ち、(無宇宙の側にある「元型」に従って)神身を築き、

みづからもまた^{ヒト}ウニツカミの一員(人の身ながらの神)と

なることができるのである。

なお、秘稿「教愛寮の講話」にも、『この神人出生の神儀

行事を^{ハラヘミツギ}ミソギと称して、^{ハラヘミツギ}祓禊と呼び〜』とあることから

解るとおり「ウケフミ」とは具体的にはミソギ行事のこと

である。

別の秘稿にも『^{ヒカミ}日神の神言靈を称へつつあれば、人の身
ながら神の身と成るべきなり』とあるので、^{コタマ}言靈^{まじ}奉称行
もまた、そうしたウケフミの一環であることが解る。

^{トヨアカリ}ノリトで「^{トヨアカリ}豊明は神ながらの火」と宣うのも、その
^{あか}ロウソウの^{あか}灯りを「^ヒ無宇宙の^ヒ零がそのままに結びあれて
出来た火」だと観念することが必要だからである。

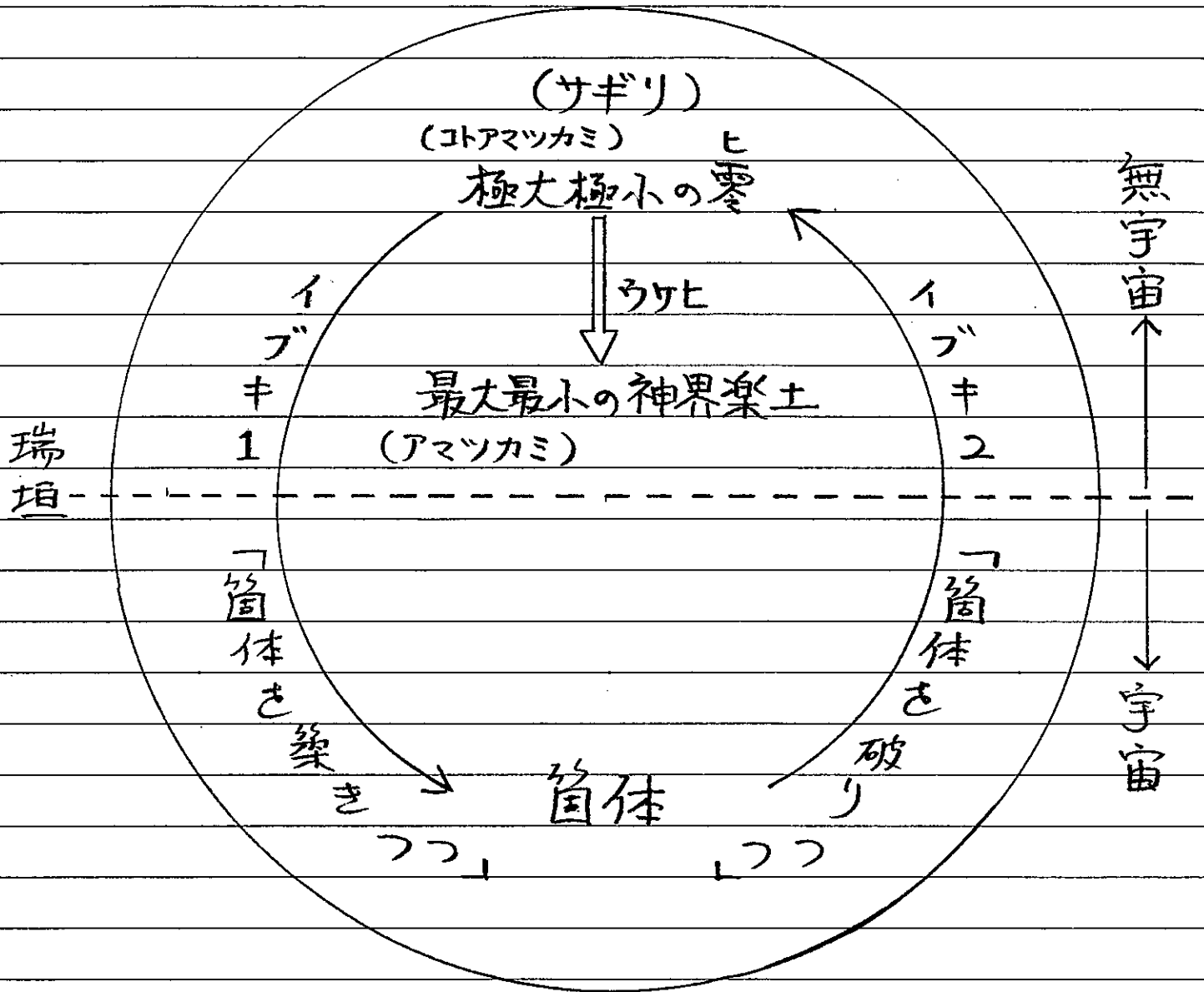
そうした^{ハラヘ}カミナガラノヒ^{ミツギ}によって^{ミツギ}祓^{ミツギ}を為し、^{ミツギ}禊^{ミツギ}を為し、
^{コタマ}コタマを奉称することが、即ち、ウケフミとなるのだ。

神身を築く^に際しては、同時に自分なりの神界を築くこと
が必要であり、そうした神界は、イウラエヤやアウラエヤの
「ヲ」に相当する。

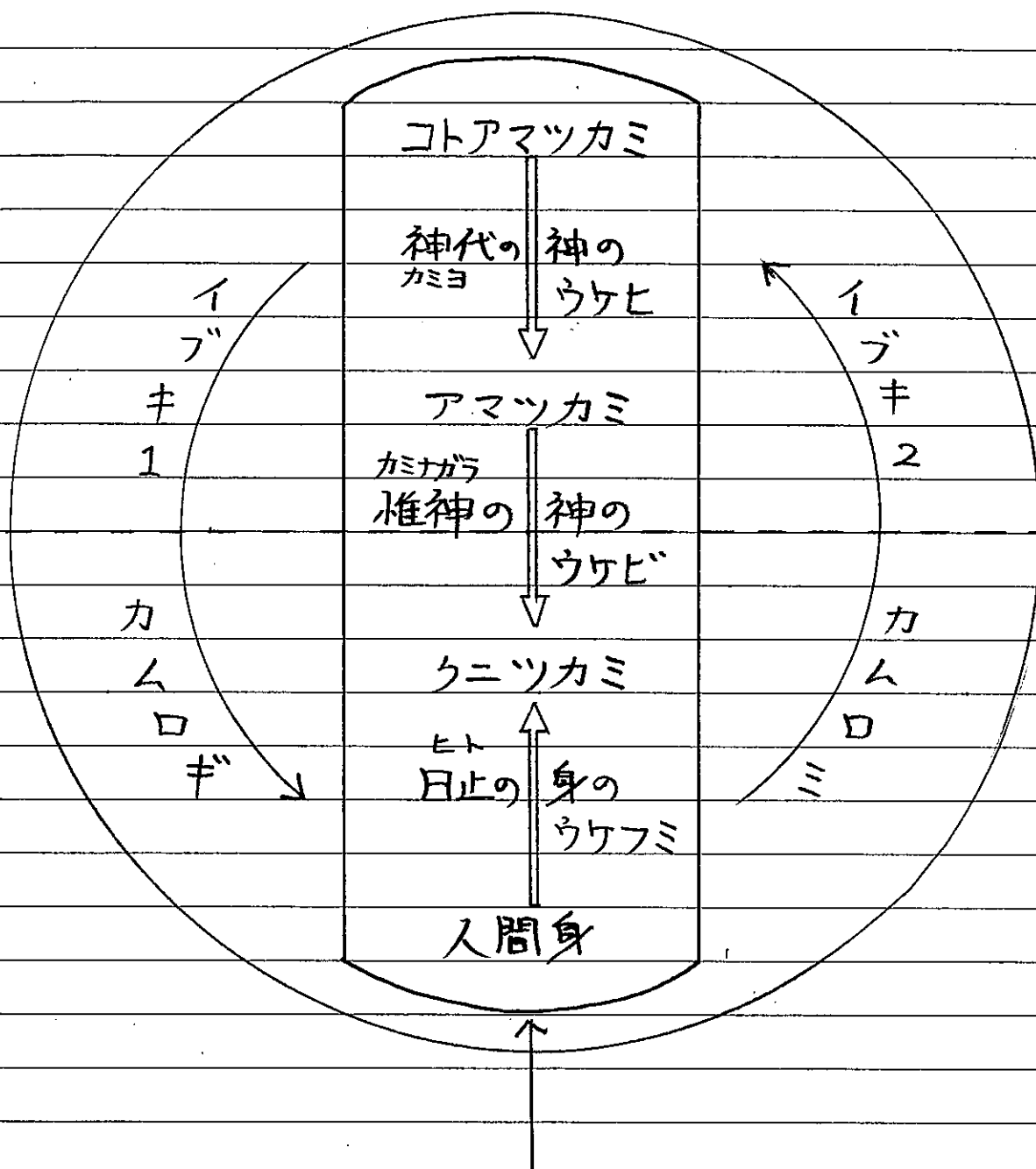
その意味において、ウケフミは決して「これらのコトワマと無関係」という訳ではないのだが、それでも、本来的には、ウケフミは「特定のコトワマと特別の関連性を持っている」という訳ではない。

ウケフミ とは、より一般的な意味で「神の^{ウケヒ}宇気毘^{カム}を得て神人と成るための、準備行為」全般を指す用語であるものと考えた方が良かったらう。

ウケヒ 基本図



ウケヒ. 癸展図



こうした「一連の正しい筋道」をそれ自体を指して、

「カミナガラ」と言う。

第七 變 易 無 常

ミソギの行事に、「イブキ」と白すのは、アマテラスオホミカミ アマノヤスガハ天照大御神の天安河の神傳である。

其のイブキに、氣吹の字を充てて居るのは、「イ」の妙用であるとの義理から來たのである。

イとは、氣息の義で、廣い意味での呼吸である。廣い意味でと云ふのは、私どもの肉體的に、口や鼻や毛孔などの呼吸と云ふのではなく、萬類萬物が、大宇大宙として、出入往返することを指すのである。都べてのものが、相互に有形と化^ナり、無形と變りつつ、相互の世界を造りつつ、まに破りつつ、變轉窮り無き活動の筋道を主る神音で、神名である。と白しますのは、大宇宙神の御活動を、日本民族は「イ」と稱へまつるのだとの義である。

日本民族の詞としては、神の稜威を仰ぎて發する音が、イなのである。

ミイズとは、本來、神としての◎を種子とし、ミを體とし、其のミズの威嚴妙用を仰いて、畏みまつるが故に、イの一音を加へて・イの音が加はつて、ミイズと稱へまつらるのである。故に、ミズは、ミイズのイが省かれたのではなく、ミズにイの加はつたのがミイズなのである。

それで、此の「イ」は、大宇宙の呼吸だと云つたならば、稍眞を傳へ得るであらうか。大宇宙の呼吸であるから、小宇宙としての萬類萬物の呼吸も、其の内に運行する。小宇宙たる私どもの

呼吸を、大宇宙の呼吸と一つにする。これが、氣吹の神傳を一言にして盡すものである。それから、「ブ」とは、經・二・等の複數語で、經過運行の敏速なる意味である。「キ」の音義は、本來、凝止結晶であるが、イブキのキは、キダとか、キザムとか、キルとかのキと等しく、區切りの意を示して居る。「ブキ」の二音を「イ」に加へたのは、神の稜威が、出でては歸るのに、必、簡體を築きつつ、破りつつ、一段二段と變化して行くもので、人の身の漫然と考へるような、直線的のものではないことを教へた詞である。絶對的直線と云ふものの無いことは、現代科學も證明して居るが、古典は、太古以來之れを傳へて、氣吹の狹霧と教へてある。

氣吹の狹霧とは、神の稜威で、生老病死を定むる三柱神として、無始終に、無際限に、神界樂土を修理固成遊ばされつつましますので、ヒツであるから、大小長短廣狹厚薄深淺等に拘はらず、直線ではない。従つて、襖祓の行事としての氣吹も、直線的ではならぬ。

前に、息を絶ると申しましたが、それは、經津能御魂の神儀で、五十串の祕事で、最初に、身を洗ひ清め、火食を絶ち、太陽を拜し、太月を仰ぎ、神名を奉稱して、振魂の神事を行ひつつ、漸漸次第と、鎮魂の境に入る。

鎮魂とは、「フツミタマ」で、經津主神の神德に導かれつつ、神國樂園を築き成すの義である。「フツ」とは祓で、祓言で、二であり經過であるのフと、一定の區域から突き出で進み行き、亦

退き去るのツと、二音合成の一語で、摧破調伏で、改廢整理で、内外自他を靖寧和平ならしむるの祕言である。永世ナガヨの神事に、必、息を拂ひて後に吸ひ入るるのは、此の祕事から來て居る。「ミタマ」とは、神の稜威の身であるとの義で、生産靈イクムスヒ・足産靈タルムスヒ・玉留産靈タマツメムスヒの三産靈ミムスヒたる稜威ミヅであり、また人天萬類であるとの神の言靈コトクマである。

故に、「フツミタマ」とは、祓の結果を示したので、祓の神の神徳を體し得、また顯し得たるもので、氣吹戸主イブキドヌシの神儀と稱へまつるのである。唯、朝廷に鎮魂の御神儀として行はせらるるは、九重の上なる御事で、亦自異なるものでありませう。

振魂の行事は、其の初步の形式を、先に説明しましたが、立坐行臥の位置に於て、千變萬化するので、其の各に就ては、各自の境涯に應じて、お話するの外は無い。が、先づ初步の形式に熟して、さて、端坐或は直立して、息を拂ふ。拂ふには、上體を徐徐に前屈しつつ、經津能御魂フツノミタマの神音と共に拂ひ去るのである。が、之れは、容易に息の絶ゆるものではない。そこで、自分に能ふかぎりまで拂つて止める。此の止めると云ふのは、出しも入れもせぬので、それも出来るだけ長く止める。耐へられぬところで、徐に上體を起しつつ、強く深く長く大きく吸ひ入れる。此の時の神音は、宇斗能神言靈ウツノカミコトクマである。そうして、這入る限り入れる。其の入れかたは、喉ではなく、氣管ではなく、ココに入れるのである。ココに入れるには、此う云ふ要領で、繰り返し繰り返す。

ハラ(腹中)

ハラ

天照大御神の天安河の神傳 あまのやすかわ 「イ、イ、イ、イ、イ」と宣る意味

一、大宇宙神の御活動を「イ」と稱へまつる。

一、「イ」とは、「氣息」の意味で、広い意味の呼吸のことであり、肉体的呼吸だけでなく、すべてのものが大宇宙として出入往返することを云う。

一、「神の稜威」を仰ぎて発する音が、「イ」である。

一、「イ」とは、すべてのものが、相互に有形と化り、無形と変わりつつ、相互の世界を造りつつ、破りつつ、変転きわまりなき活動の筋道をつかさどる神音であり、神名である。

一、「イブキ」とは、小宇宙たる人間の呼吸を大宇宙の呼吸と一つにすることである。

一、「ブ」とは、経過運行の敏速なることを意味し、「キ」とは、区切りの意味である。

一、「イブキ」とは、「神の稜威」が、出でては帰るのに、箇体を築きつつ、一段二段と変化してゆくと共に、円滑に「修理固成」されてゆくことを意味する。それを「氣吹の狭霧さぎり」という。

。幸 250 頁

ヨ ——— 小宇宙としての箇体。
↓ 生死運転するところのモノ

イ ——— そのモノの完成した（成り成りたる）姿。
この完成は「神の^{カミ}イグキ」による。

人間身に即して言うと、このイグキは、主として、
ミソギ（カムロギ）の方のイグキ。

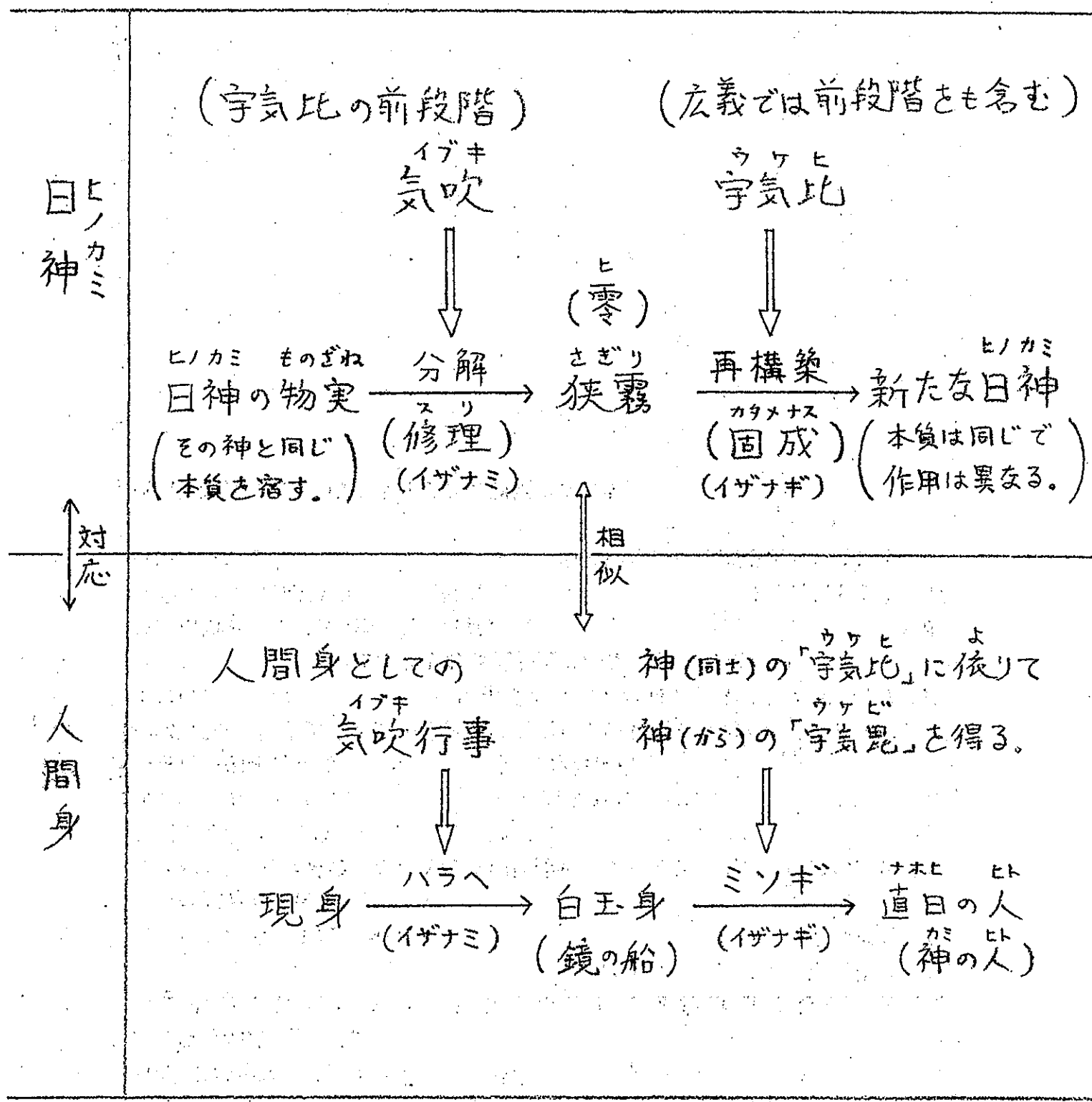
大祓の祝詞の四神は、ハラヘ（カムロミ）の方。

。講演録 96-97 頁

イ ——— 全体神の活用^{はたらき}そのものを指して言う。
即ち、「神の授威」を仰いで言う。

→ この「神の^{カミ}授威^{ミツ}」の出入往返を称して
「イグキ」と言う。

「イブキ」と「ウケヒ」



上段の用語は(幸)147頁ほかより。

下段の用語は「日本民族の信仰」(-)より。

觀門の見方

ミイツ
サザリ

空なる實在[?] (神の綾威の二とて、極、無極、極大極小と表現)

裏↓無宇宙

表↓筒體

表の表↓大宇宙

裏の裏↓點

裏の表↓零

表の裏↓直日

表と裏を合わせると↓ニ↓経↓◎↓◎↓三↓身↓一↓○↓

火経身↓日止↓完全圓成の宇宙である筒體である

此のやうな國を高天原ととなへて日止と呼ぶのは、完全圓成の宇宙である箇體であるとの義である。

ですから日止（ひと）と呼ぶ人は國家統治の全權であり完全圓滿なる上下である。

言ひ換へると、日本天皇を日止にして、日本天皇國を日止にして高天原にして有道と云ふのである。

ひとみなは、なをことにしてわれありと、かたみにぞしるがみのうけひて。

マウシゴイフノニハ、クラシニコマラスヒトゲナケレハ
孟子曰。無恒産。而有恒心者

タシキコトヲスルモノニテイノガ、オホクノヒトノ、マシニ
惟士爲能。若民則無恒産。因

ル、ソレダモラ、ソレヲノヒトヒトガ、アンラクニクラセル
無恒心。苟無恒心。放辟邪侈。

ウニシテナルノガ、マツリゴトノ、ダイイニナル。
無不爲已。及陷於罪。然後從而

刑之。是罔民也。
アンラクニクラセルヤウニセズシテ、ワルモノノガ

イタカヲトシ、ソレヲツカイハテ、セムルノハ、マルデ、アミ
フハツシ、ヒトヲトシハ、ヒトヨコロスヤウナモノデアルト

マコトニソノホリニナル

マツリゴトとは國家の中心から外郭に向つて油を供給することである。

其の供給された油を運用して外郭から中心に還して行くのが祭である。

それで、マツリゴトとマツリとは内と外と、上と下と、本と末と、枝葉と根幹とが相互に交流疎通する行事なので、相互に表裏をなしつつ國家を治め、天下を和ぐる妙用を現するのである。

油とは比喩である。

猶太人が膏注ぎたるものと云へる如く、油とは神の稜威である。

それ故に又、水とも云ひ、火とも云ひ、靈とも呼び、無とも称するので、極で、無極で、極大で、極小で、物で、純男で、罔象女で、佛で、恵保婆で、閻魔天で、必竟、空なる實在である。

其の實在は裏から觀れば無宇

宙で、表から觀れば箇體で、裏の表から觀れば大宇宙で、裏の裏から觀れば點で、裏の表から觀れば零で、表の裏から觀れば直日で、表と裏とを合せて觀れば二で、経で、○で、◎で、三で、身で、一で、○で、火経身で、日止で、人で、人間世界にほかならぬのである。

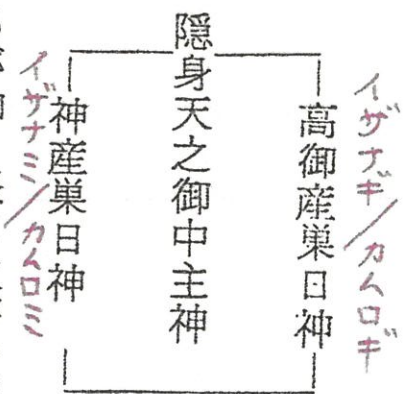
火人（ひと）と日止（ひと）と人間世界との關係を簡単に説明すれば如上である。

そのそのところ、ここにそのさまの、うつるをみればかみながらなる。

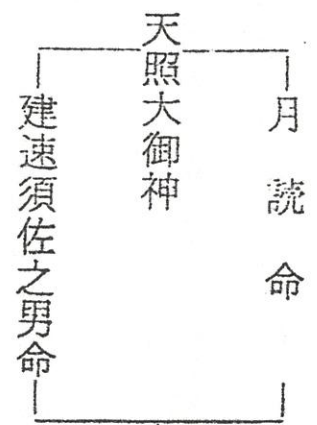
以上 昭和十四年五月十五日

山谷 識

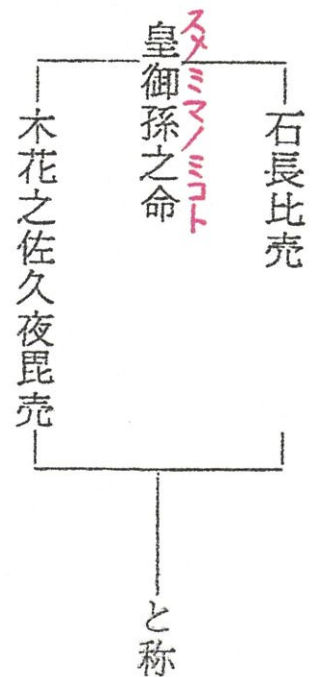
はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

大國主の別名

葦原醜男

意富耶馬台須米良岐美

と称へまつるのである。

八重事代主

大國主の息子

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し、「人類世界の中心」として機能することに、よって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、アシハラシコラとヤヘコトシロヌシの諸力を行使できるようにするのである。

ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変わるので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコラは生大刀・生弓矢で八十神と阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れば

大御神 (全体神) はすべて、同じ全体神であり、

神名の違いは人間の側の観点や、その神徳による

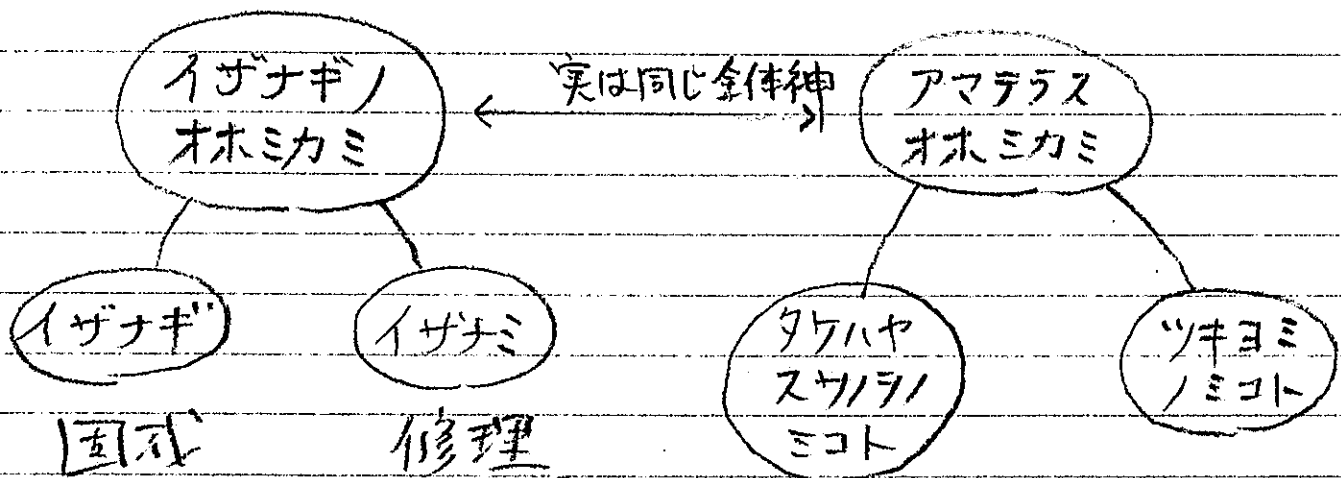
呼び分けでしかない。

- イザナギノ大御神 修理国成、宇宙の創造と破壊と司る。
- アマテラス大御神 宇宙の中心としての機能。

→ アマテラスに内在する諸力 (ツキヨミ・スサノヲ) と

外在化させて、三位一体となった姿と

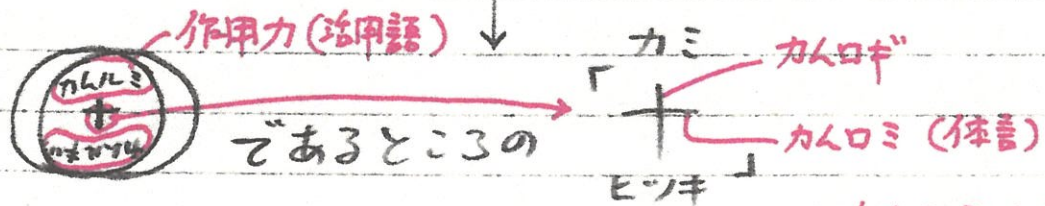
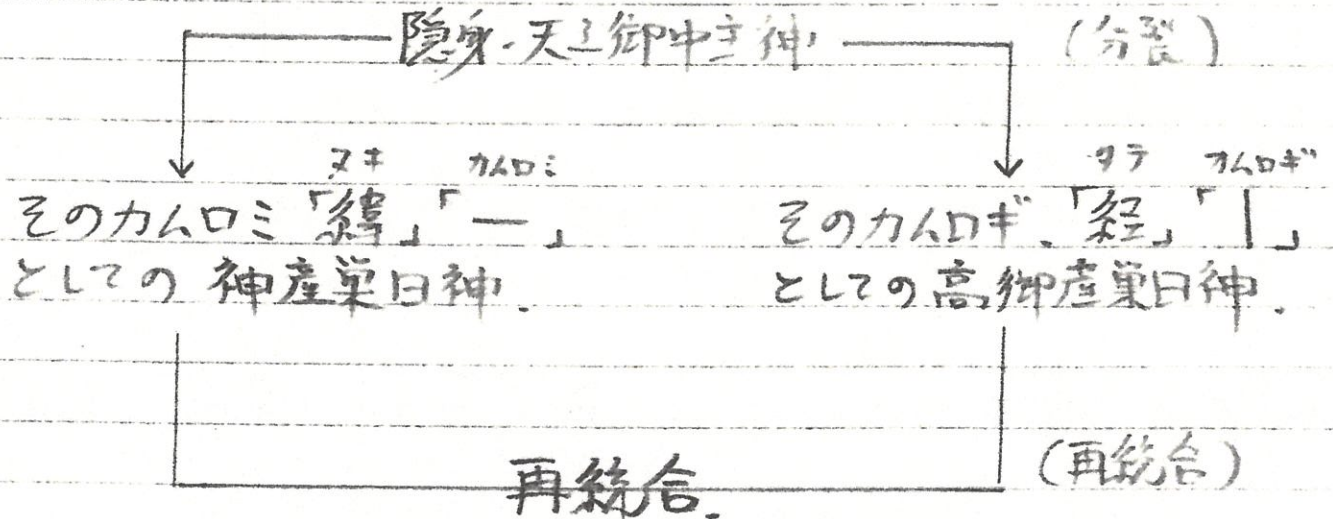
「三貴子」(ミハコノウヅノミコ) と称する。



未来250頁の図。「ヒノカミとしては」の説明。

未来230.

『その「^{カミ}十」と結び結ぶ（元としての）^{ヒノカミ}隠身』



即ち、「ミオヤ」と称ふる「加徴」であるところの
 アノミオヤ ヒノカミ
 ⇒ 天祖 や 日神 を意味する。

・カムルミカムロギの作用力によって、カムロギとカムロミは正しく結合している。

典型的には（ヒノカミとしての）天照大御神。

→ 基本的には、『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タノカミ→ミノカミと「組み直されて」いくのである。

とか天国とか呼ぶに等しく、主観しては、「天忍穗耳命」と称へまつる。亦名は、「稜威三柱神」にてまします。

其のやうに、「高天原」^{タカマノハラニ}「神留坐」^{カムツマリイマシマス}「皇親」^{スメラガムツミマスナル}「神漏岐・神漏美乃命以三」^{オホセメテ}「八百万神等示」とあるの

を言ひ換へると、「スメラガムツミマスナル」「ミオヤノカミ」「ミオヤ」「オヤ」と称ふる「加徴」^{カミ}は、即、「陰

陽」^ヲで、「天地」^{アメツチ}で、「経緯」^{タチスキ}で、「

「隠身」^{ヒノカミ}」の「カムロギ・カムロミ」としての「ヒメコトタマ」を仰ぎ、「ヒメコトタマ」のまにま

に、「八百万神等」を「カミナガラ、カミノマニマニ、集へ給ふ」のである。それ故に、

「神集集賜比」「神議議賜比」は、「カムツドヘツドヘタマヒ」と読み、「カムハカリハカリタマヒテ」と読む。 **隠身が分裂して、結び結んで「十」となる。**

此の「カムハカリハカリタマフ」は疑義を相談するのではない。中心たり根本たる「神」には固より疑義は無いのである。けれども、外廓たり枝葉たる八百万神は之を知らぬから、忘れて居るから、中心より外廓に向つて、根幹より枝葉に対して、疑ひ無からしむべく八百万神の議を開陳せしむるものである。之を、人間的に云へば、直く正しく明く美しく誠に善き与論を作るのである。さうして、「神命」^{カムコミカミロミ}を明にし、その神命に応へまつる。之が、「カムロギ・カムロミ」なる「天神諸命」^{ヒノカミノオホセ}の「カミナガラ、神ノ国ヲ築キ成ス憲法」^{ミコトノリ}である所以である。此の「神国ノ憲法」は、

「我皇御孫之命波」^{アガ}「豊葦原乃水穂之国乎」^{アガ}「安国斗平久知所食斗」^{アガ}拝承しまつるのである。

③

・説明

カウ、ルミ

1

bu	2
	12
	7
	1

力
4
2
7→

未228

相動

合するに至る。
 連度増あはるゝの位置と破りて
 施転活躍の発き出でて

↑
字合
可子

カ
5
12
3

来 230.

未 228

ムツミマスLの神性 ← カムロキ・カムロミL

ムツミマスルの神像

3

← 新しもの子

②

+

井
井
井
井
井
井

(A)

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

別のページに.

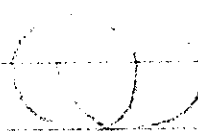
カムロギ — ヒ .

カムロニ — フ () とある

そこから考えて



の



は

外郭と.

十 は中心とその作用力を意味する神象である

ものと考えられる。

外郭を築くにも、中心を築くにも、

カムロギとカムロニは ^{同じ} 背しく必要だからである。

中心はしばしば . と表現されるが、

中心を意味する付加要素として ^ヒ の一である。

その点と ^{かた} 象を表現しようと思うと、十 とある。

産霊産魂の妙用

「皇親」は、古来「スメムツ」「スメラガムツ」と呼び、また「神祖たる皇親」であるとして、「スメラガムツミマスナル」とも呼び、「カムロギ・カムロミ」と称えまつるところの「オヤ」であります。

「ムツミマス」とは、相和ぎ相牽き相合うの意味で、男と女、陰と陽、天と地の相互活用であり、詞としては、「ヒ」と「フ」、数としては、「一」と「二」、象・図としては「・」と「○」であります。

「ヒ、一、・」は「カムロギ」と称え、「フ、二、」は、「カムロミ」と称え、相合いては、「ミ」と呼び、「」と書き、「皇親」のことであります。

このように「ムツミマス」なる「神性」は、「カムロギ・カムロミ」であります。その神性の発き出て回転活躍の速度を増す時は、相互にその位置を破って相結合する（ムスビムスビ産霊産魂）に至り、その「結合した状態」を「カムルミ・カムルギ」と呼びます。

ムスビムスビ ミハタラク産霊産魂の妙用を、これらを合わせて「カムルミ・カムルギ・カムロギ・カムロミ」と称えまつります。

三 九州の日向の国の橘

7 禊祓と神々の化生

という小さい瀬戸のほとりの橘原という所。その所在は今不明。

四 書紀に「因曰自レ此莫レ過、即投ニ其杖。是謂ニ岐神ニ也。」また「乃投ニ其杖曰、自レ此以還雷不ニ敢來。是謂ニ岐神。」とあって、岐神をフナドノカミと訓ませている。また道饗祭の祭神の

の「久那斗」がある。フナドは経勿所、クナドは来勿所で、ここから来るな意。

五 書紀には「長道磐神」とある。道の長道を掌る磐の神の意であろう。帯から連想したもの。

六 名義未詳。

七 書紀には「煩神」とある。煩いの主の意。八 袴と同じ。腰から下に着るもの。

九 道の分れた所を掌る神。道饗祭の祭神に「八衢比古、八衢比売」がある。衢の神。

一〇 冠とあるは不審、御蔭(ミカ)即ち愛のことか。播磨風土記神前郡蔭山里的条に「品太天皇御蔭墮於此山。」とあり、持統紀元年三月の条には「以ニ華縵ニ進ニ于殯宮。此曰ニ御蔭。」とある。これらを参考するとミカゲと訓むべきかも知れない。

二 書紀には「開嚙神」とある。ただし禪に化生した神。名義未詳。

三 玉などをつけた手にまく装身具。

四 同神を沖と辺に分けたもの。疎は遠ざかる意。

五 ナギサは波限(汀)。

六 カヒは間、ベは辺、ラは接尾語。遠い沖と汀の間を掌る神。

七 前の六神は陸路の神、後の六神は海路の神。

八 瀬戸の上の瀬は潮流が早い。

九 瀬戸の下は潮流が緩やかである。

御

是を以ちて伊邪那伎大神詔りたまひしく、「吾は伊邪那志許米上志許米岐此の九字は音を以

穢きたなき國に到りて在りあ祁理けり。此の二字は音を以ゐよ。故、吾は御身の禊祓みみみそぎむ。」とのりたまひ

て、竺紫の日向の橘の小門の阿波岐あはき。此の三字は音を以ゐよ。原に到り坐して、禊祓みそぎひたまひき。

故、投げ棄つる御杖みつゑに成れる神の名は、衝立船戸神。次に投げ棄つる御帶みおびに成

れる神の名は、道之長乳齒神。次に投げ棄つる御囊みふくろに成れる神の名は、時量師ときはかり

神。次に投げ棄つる御衣みけしに成れる神の名は、和豆良比能宇斯能神。此の神の名は次

に投げ棄つる御禪みはかまに成れる神の名は、道俣神。次に投げ棄つる御冠みかぶりに成れる神

の名は、飽咋之宇斯能神。宇より以下の三字は音を以ゐよ。次に投げ棄つる左の御手みでの手纏たまきに成れる

神の名は、奥疎神。奥を訓みてオキと云ふ。下は此れに効へ。次に奥津那藝佐毘古神。那よ

下の五字は音を以ゐよ。次に奥津甲斐辨羅神。甲より以下の四字は音を以ゐよ。下は此れに効へ。次に投げ棄つる右の御

手の手纏たまきに成れる神の名は、邊疎神。次に邊津那藝佐毘古神。次に邊津甲斐辨

羅神。

右の件の船戸神以下、邊津甲斐辨羅神以前の十二神は、身に著ける物を

脱ぬくに因よりて生なれる神なり。

是に詔りたまひしく、「上つ瀬かみは瀬速せはやし。下つ瀬しもは瀬弱せよわし。」とのりたまひて、

三 簡は星(三)で底中上の三簡之男は、オリオン座の中央にあるカラスキ星(参)で航海の目標としたところから航海を掌る神とも考えられる。また山田孝雄博士は、「底津津の男」「中津津の男」「上津津の男」で、津即ち船舶の碇泊する所を掌る神とされた。

六 上をカミと訓まないための注であるが、ウハと注せずウヘとしてゐるのは、通常の語、記伝にいわゆる「言の居たる方」を注したのである。

二 阿曇は氏、連は姓(姓)。カバネは氏や家の尊卑をあらわす称号。連の姓は主として神別に賜わったようである。又 祖先神。

三 名義未詳。新撰姓氏録には安曇連は「綿積神命児、穗高見命之後也」(河内国神別、地祇)とあって伝を異にしてゐる。

二 摂津の住吉の大神である。ただし延喜式神名帳には住吉坐神社四座、住吉大社神代記にも御神殿四宮としてゐる。これは神功皇后を加えたからである。

三 天にましまして照り給う神の意で日神。三 月神。月読は月を数える意で曆に關係がある語かと思われる。書紀には月弓尊、月夜見尊などとも記されている。月神は男性と信じられてゐた。

四 勇猛迅速に荒れずさぶ男神の意。嵐神。以上三神の化生と類同した伝が釈史卷一所引の五運歴年記に見える。即ち
啓陰感陽、布衣元氣、
乃孕中和。是為人也。

8 三貴子の分治

初めて中つ瀬に墮り迦豆伎て滌ぎたまふ時、成り坐せる神の名は、八十禍津日神。

神。下は此れに效へ。次に大禍津日神。此の二神は、其の穢繁國に到りし時の

汚垢に因りて成れる神なり。次に其の禍を直さむと爲て、成れる神の名は、神

直毘神。毘の字は音を以るよ。次に大直毘神。次に伊豆能賣神。并せて三神なり。伊より

に水の底に滌ぐ時に、成れる神の名は、底津綿上津見神。次に底筒之男命。中

に滌ぐ時に、成れる神の名は、中津綿上津見神。次に中筒之男命。水の上に滌

ぐ時に、成れる神の名は、上津綿上津見神。次に上筒之男命。此の三

柱の綿津見神は、阿曇連等の祖神と以ち伊都久神なり。伊より以下の三字は音を

阿曇連等は、其の綿津見神の子、宇都志日金拆命の子孫なり。宇都志の三字

底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命の三柱の神は、墨江の三前の大神なり。

是に左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神。次に右の御目

を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、月讀命。次に御鼻を洗ひたまふ時に、成

れる神の名は、建速須佐之男命。須佐の二字は

右の件の八十禍津日神以下、速須佐之男命以前の十四柱の神は、御身を滌

ぐに因りて生れるかみなり。

此の時伊邪那伎命、大く歡喜びて詔りたまひしく、「吾は子生み生みて、生み

伊邪那伎之大御神
イザナギノオホミカミ

二 治めておいでになるその中で。

三 伊邪那岐命が委任された国(海原)を治めな

いで。

三 須は鬚、心は胸、幾握りもの長さのあるあごひげが胸の前に垂れさがるまで。記伝に「ただ齡の長(ナ)しくなれるを云古語」と説いているが、中巻垂仁記に、本牟智和氣命は「八拳鬚心の前に至るまで」物が言えなかつたとあり、出雲風土記仁多郡三沢郷の条に、阿遲須伎高日子命は「御須髪八握生ふるまで」昼夜泣かれて物が言えなかつたとあることから考えると、雷神に特定の形容のように思われる。

四 激しく涙を流して泣いた。書紀には哭泣、血泣、涕泣にイサチの旧訓がある。イサチルは上

9 須佐之男命の涕泣

三 草木の枯死した山。

六 泣いて河や海の水を浚えつくした。寺田寅彦氏は、噴火のために草木が枯死し河海が降灰のために埋められることを連想させると説かれた(風土と文学)。

二七 田植頃の蠅のように。騒ぐことの形容。

一八 記伝には「涌」の誤りとして「満」の方がよい。悪神の騒ぐ声が田植頃の蠅のように満ち。

一九 いろんな悪

靈邪鬼による禍害。物は靈(マ)の意。三 記中僕(の)字には一定の用法があつて、身分の低い者が高い者に対する場合の自称代名詞。

三 亡き母。礼記に「生曰父曰母、死曰考曰妣。」

とある。三 記伝に地底の片隅と解している。

三 神は神の行動を示す接頭語。ヤラヒは遣らひで追い払う意。追放なかつた。

二四 近江の

多賀神社に鎮座されている意。書紀には「構幽宮於淡路之洲、寂然長隱者矣。」とある。

の終に三はしらの貴き子を得つ。」とのりたまひて、即ち御頸珠の玉の緒母由

良邇（此の四字は音を以て）取り由良邇（志）て、天照大御神に賜ひて詔りたまひしく、

「汝命は、高天の原を知らせ。」と事依さして賜ひき。故、其の御頸珠の名を、

御倉板舉之神（板舉を訓みて）と謂ふ。次に月讀命に詔りたまひしく、「汝命は、夜

の食國を知らせ。」と事依さしき。（食を訓みて）次に建速須佐之男命に詔りたまひ

しく、「汝命は、海原を知らせ。」と事依さしき。

故、各依さし賜ひし命の隨に、知らし看す中に、速須佐之男命、命させし國

を治らずて、八拳須心の前に至るまで、啼き伊佐知伎。（伊より下の四字は音を以て）其の

泣く狀は、青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是を以ち

て惡しき神の音は、狭蠅如す皆満ち、萬の物の妖悉に發りき。故、伊邪那岐

大御神、速須佐之男命に詔りたまひしく、「何由かも汝は事依させし國を治ら

ずて、哭き伊佐知流。」とのりたまひき。爾に答へ白ししく、「僕は妣の國根の

堅州國に罷らむと欲ふ。故、哭くなり。」とまをしき。爾に伊邪那岐大御神、

大く忿怒りて詔りたまひしく、「然らば汝は此の國に住むべからず。」とのりた

まひて、乃ち神夜良比爾夜良比賜ひき。（夜より以下の七字は音を以て）故、其の伊邪那岐大神は、

淡海の多賀に坐すなり。

ハ 鞍は矢入れ。多くの矢竹の入る鞍の意で、書紀には「千箭之鞍」とある。

天照大神と須佐之男命

1 須佐之男命の昇天

九 ヒラの語義は明らかでないが脇の意か。

二〇 書紀には「稜威之高柄」とある。威勢鋭く高い音を発する柄。柄は獣皮で作った巴形のもので、左手の肘につけて弓弦の反動を受けるに用いられた。

二 弓腹は明らかでないが、弓の末(上部)に腹という部分があったと思われる。書紀には「振起弓彌」とある。振りは接頭語、立ては起こしの意。

三 土の堅い空地。

三 両方の股(む)まで踏み入れ。書紀には「踏堅庭」(踏堅股)とある。

四 軽い柔らかい雪のように。

五 蹴散らして。クワ・クキ・クエのうちクキ・クエはキ・ケとなり、クワも力となりつつある。

六 書紀には「舊稜威之雄話」とある。土地をしつかり踏んで威勢鋭く雄々しい叫びを挙げたの意。

七 書紀には「黒心」とある。朝廷に対する反逆心。

八 伊邪那岐大御神のお言葉で。

九 事情を告げ申そうと思って。

二〇 二心。謀叛心。

二 朝廷に対する忠誠心で、心の邪(穢)(きた)いことの反対。統紀宣命に「浄き明き心」「清き明き正しき直き心」を以って朝廷に仕え奉れとあり、また和氣清麻呂を「穢(きた)き奴(やつ)」として退け給ふに依りて、清(きよ)麻呂の名を改めて穢(きた)麻呂とされたことが見えている。

故是に速須佐之男命言ひしく、「然らば天照大御神に請して罷らむ。」といひて、

乃ち天に参上る時、山川悉に動み、國土皆震りき。爾に天照大御神聞き驚き

て詔りたまひしく、「我が那勢の命の上り来る由は、必ず善き心ならじ。我が

國を奪はむと欲ふにこそあれ。」とのりたまひて、即ち御髪を解きて、御美豆

羅に纏きて、乃ち左右の御美豆羅にも、亦御縋にも、亦左右の御手にも、各

八尺の勾璫の五百津の美須麻流の珠を纏き持ちて、美より流までの四字は昔を

は千入の鞍を負ひ、入を訓みてノリと云ふ。下は此れに。比良邇は五百入の鞍を附け、亦伊

都此の二字は。の竹柄を取り佩ばして、弓腹振り立てて、堅庭は向股に蹈み那豆美、

三字は音。沫雪如す蹶散かして、伊都二字は音。の男建ケブと云ふ。蹈み建びて待ち問ひ

たまひしく、「何故上り來つる。」と、とひたまひき。爾に速須佐之男命、答へ

白ししく、「僕は邪き心無し。唯大御神の命以ちて、僕が哭き伊佐知流事を問

ひ賜へり。故、白し都良久、三字は音。『僕は此の國に往かむと欲ひて哭くなり。』

とまをしつ。爾に大御神詔りたまひしく、「汝は此の國に在るべからず。」との

りたまひて、神夜良比夜良比賜へり。故、罷り往かむ狀を請さむと以爲ひてこ

そ参上りつれ。異心無し。」とまをしき。爾に天照大御神詔りたまひしく、「然

らば汝の心の清く明きは何して知らむ。」とのりたまひき。是に速須佐之男命

三 二つの小分け(断片)に折って、
六 剣とは無関係な「瓊の音も玲瓏と」という
形容があるのは、後の文
に引かれた不用意の挿入
であろう。
2 天の安の河の
誓約

七 書紀には「天渟名

(天渟井)、別名「去来之真名(天渟井)」とある。
名義未詳。井は用水を汲む所の意で、この井は
安の河の中の井と見るのが穏やかであろう。

八 振りには接頭語、滌ぐは洗い清める意。

九 書紀には「齟然咀嚼」とある。「さ」は接頭
語、嚙みに嚙んでと語を重ねて動作を強めた表
現。

一〇 吐き出す息吹の霧の意。雄略紀には「呼吸
氣息(イフク)、似(ニ)於朝霧。」とある。

二 書紀には「田霧姫命」とある。霧のキは乙
類の仮名であり、紀も乙類であるから、霧に因
んだ神名であろう。多(田)は接頭語か。

三 沖の島に坐す女神の意。

三 書紀には「市杵(イサギ)島姫」とある。イチキ
はイツキ(斎キ)の転音ではあるまいか。

四 船の寄る所に坐す女神の意。

五 書紀には「満津姫」とある。早瀬の女神。

六 正勝は正しく勝った、吾勝は私は勝った、

勝速は素早く勝ったの意。日は太陽に因んだ名、
忍穂は多し穂で豊かに稔った稲穂、耳は尊称で
あろう。

一七 書紀には「天穗日命」とある。これも稲穂
と太陽に因んだ神名であろう。

一八 天つ日、即ち太陽の子の意。根は親愛の意
をあらわす接尾語。

一九 生き生きとした日の子の意。

二〇 熊野は地名。久須毘はクシビ(奇霊)と同義。

答へ白ししく、「各宇氣比て子生まむ。」とまをしき。宇より以下の三字は音を以
るよ。下は此れに効へ。

故爾に各天安河を中に置きて宇氣布時に、天照大御神、先づ建速須佐之男命
の佩ける十拳劍を乞ひ度して、三段に打ち折りて、奴那登母由良爾、此の八字
は音を以るよ。下は此れに効へ。

天の眞名井に振り滌ぎて、佐賀美邇迦美て、佐より下の六字は音を以
るよ。下は此れに効へ。

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、多紀理毘賣命。此の神の名は
音を以るよ。亦の御名は奥津

島比賣命と謂ふ。次に市寸島上比賣命。亦の御名は狹依毘賣命と謂ふ。次に多

岐都比賣命。三柱。此の神の名は音を以るよ。速須佐之男命、天照大御神の左の御美豆良に纏かせ

る八尺の勾璫の五百津の美須麻流の珠を乞ひ度して、奴那登母由良爾、天の

眞名井に振り滌ぎて、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御

名は、正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命。亦右の御美豆良に纏させる珠を乞ひ度し

て、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、天之菩卑能

命。菩より下の三字は音を以るよ。亦御縋に纏させる珠を乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄つ

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、天津日子根命。又左の御手に纏させる珠を

乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、活

津日子根命。亦右の御手に纏させる珠を乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以るよ。并せて五柱な

る

付表 オホミマノハラヘ

御身之禊 によりて成りませる 十四神 一覧

言霊の幸
66頁より

番号	神名	集合名	その内容
1	ヤソマガツヒノカミ 八十禍津日神	ワガレ 黄泉国の穢に因りて	カミ ナ マガツヒ 神と化りたる 妖魔
2	オホマガツヒノカミ 大禍津日神	成りませるニ柱	
3	カムナホビノカミ 神直毘神	マガ 其の禍を直さんとして	
4	オホナホビノカミ 大直毘神	成りませる三柱	〃
5	イヅノメノカミ 伊豆能売神		
6	ソコツ フタツミノカミ 底津綿津見神		イザナギノオホミカミ
8	ナカツ 中津 〃	三柱の綿津見神	伊邪那岐大御神の
10	ウハツ 上津 〃		気吹の狭霧 イブキ サギリ
7	ソコツ ツノラノミコト 底筒之男命		
9	ナカツ 中 〃	スミノエ オホカミ 墨江の三前の大神	〃
11	ウハツ 上 〃		
12	アマテラスオホミカミ 天照大御神		
13	ツキヨミノミコト 月読命	ミハシラノウヅノミコ 三貴子	ヒ 尽天尽地の次の
14	タケハヤ スサノヲノミコト 建速須佐之男命		伊邪那岐命 イザナギノミコト

ヒノカミ ヒノカミ ○神と日神の区別

○ 「零」 ----- 「サギリ」 ----- 高天原 (無宇宙)

● 「ヒカリ」 ----- 「カミ」 ----- 日神

「言霊の幸」 149 ~ 150 参照

150 頁 5 行目より

『サギリの中に生まれる神が日神である』

古事記では アメノミナカヌシノカミ (造化參神)

日本書紀では クニトコタチノミコト

旧事紀では アマユヅルヒノアマノサギリ

クニユヅルヒノクニノサギリノミコト

→ 各々 神名は異なるがすべて「同一の实在」である。

古事記底本 77 頁、「天の安の河の誓約」の段より

『吹き棄つる氣吹の狭霧によって成れる神を日神と云う』

(幸 149 頁)

(アメノミナカヌシノオホミカミ
アメテラススメオホミカミ

幸 151 頁 8 行目

『そうした氣吹の狭霧を吹き成す神は○神と云い、吹き成された側
である日神とは区別される』

↑
アメノミナカヌシノカミ
アメテラスオホミカミ

して、築き成したる宇宙は、布斗麻邇と稱する一圓相を標識基準として、不斷の活動を爲すので、事業としては、直毘大直毘神の稜威を仰ぎて、失墜することなく、國土としての高天原を築き成せよとの、神の代の神の御教と拜承しまつるのである。

「しほ」の内容として、此に擧げた古典の詞は、神の詞であるから、そのまま、神であつて、また、その神徳の妙用を教へられたのである。が、之が委しき説明は、「言靈秘説」を待つことにしよう。

第八、「生神」とは、別天神たる隱身の獨神が、八百萬の神を生み給ふので、「惠保婆の神は、宇宙の外

に在りて、宇宙を造り給ふ」と云へるもので、「神の獨子たる基督を降し給ふ」と稱するもので、「伊邪那岐命伊

邪那美命二柱神は、別天神たる獨神の陰陽で、それが、國嶋をも、國嶋を統治す主宰者をも、生み給ふので、二

柱神の共に生みませる嶋は、十四嶋で、神は、三十五神で、天地と割割きたる時、國嶋としては、高天原た

る境地で、神としては、高天原統治の日神で、天照大御神と稱へまつりて、三十五神にてましますので、その

三十五神とは、波留比比咩と稱へまつるで、我期大君にてましますので、國家としては、天皇と稱へま

つり、人天萬類としては、直日と謂しまつり、大虚空としては、二柱祖神と仰ぎまつるのである。此の二柱

祖神と稱へまつるは、生神の妙用で、祓禊と白しまつるのである。

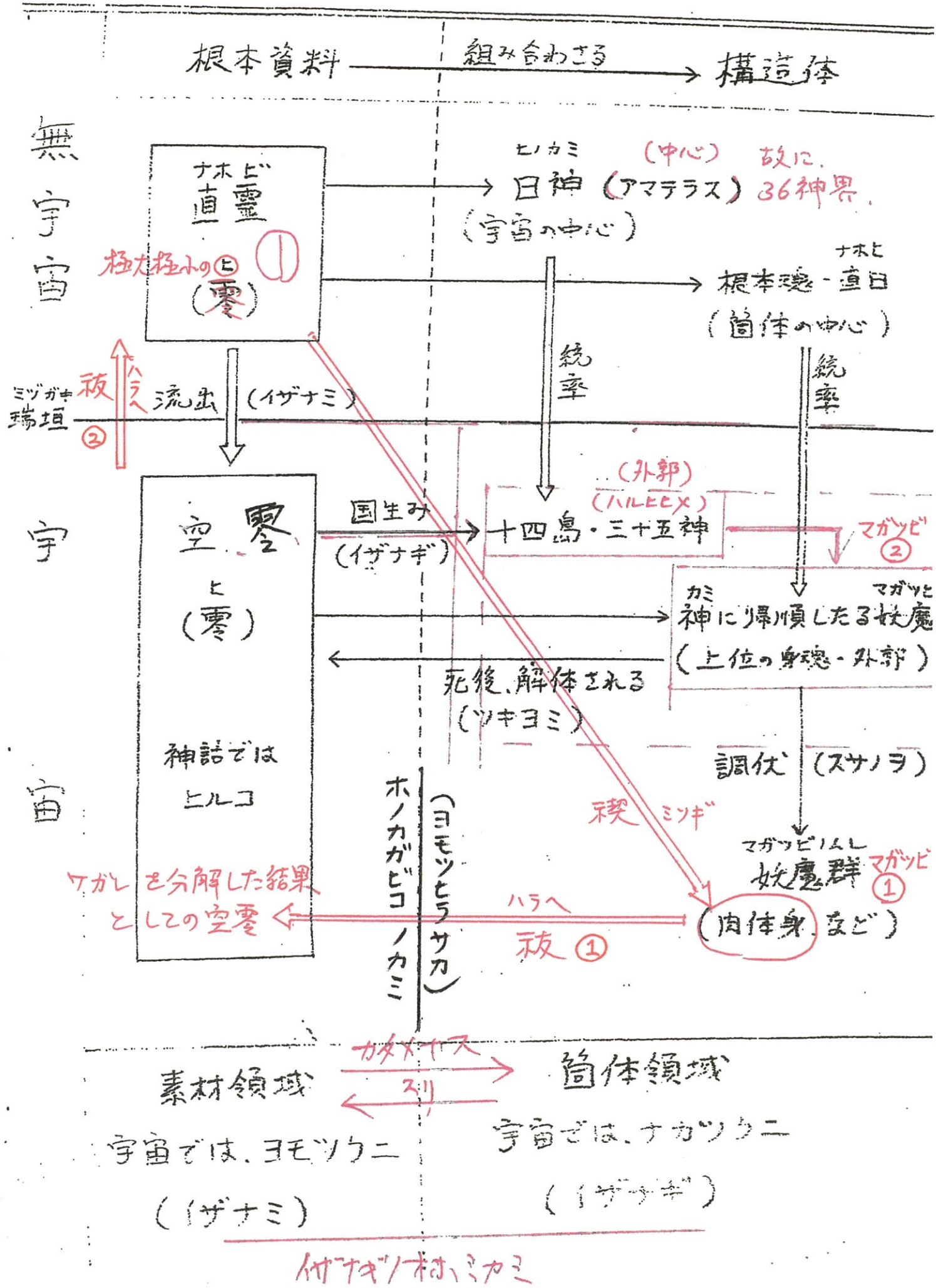
第九、「豫母都志許賣」は、如何にして生れたのか。日本紀には、泉津醜女と書き、極端に醜惡なる女と解釋

してある。「伊邪那美命の命せをよそにして、伊邪那岐命の投げ棄てられた黒御鬘の蒲子を撫ひ食ひ、筍を抜き

食ひなどした」とは記載して居るが、それだけでは、其の本質を明瞭にすることが出来ぬ。

「愛しき我が那邇妹としての伊邪那美命を、一火にて見給へば、宇土多加禮斗呂岐て、何に例へやうもなく

修理因成の機能図 直霊と空零

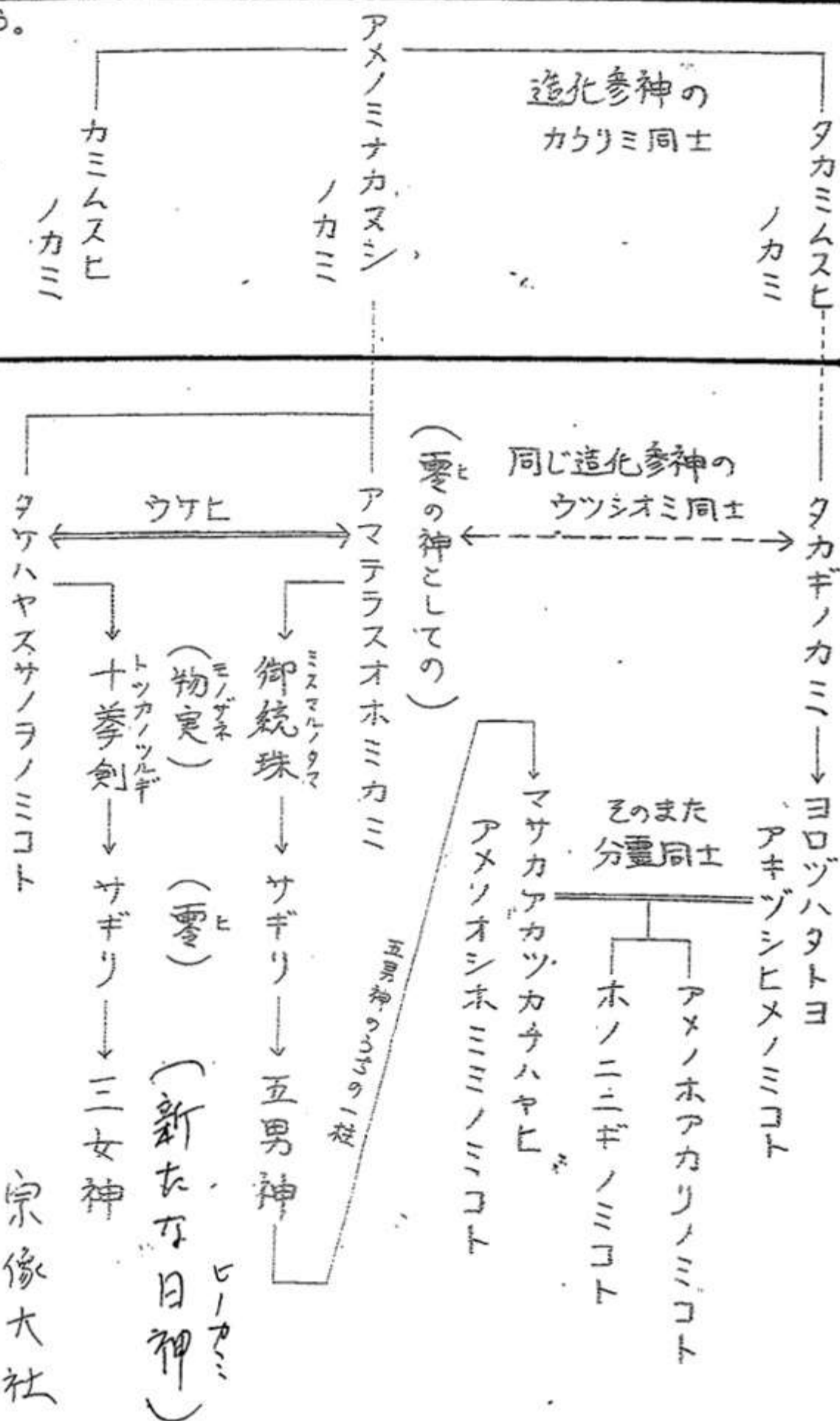


この「境地」を全体として
「アマノミナカヌシオホミカミ」

零の神の系譜 (一部)

と云う。

カウリミ↑
↓ウツシオミ



市寸嶋比賣命、亦の御名、狹依毘賣命と、多岐都比賣命と稱へまつり、建速須佐之男命が、天照大御神の左の御美豆良に纏かせる八尺の勾璫の五百津の美須麻流の珠を、奴那登母母由良に、天之眞名井に振滌ぎて、佐賀美爾迦美て、吹棄つる氣吹の狹霧に成りませる神を、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命と稱へまつり、亦、右の御美豆良に纏かせる珠を、佐賀美爾迦美て、吹棄つる氣吹の狹霧に成りませる神を、天之菩卑能命と稱へまつり、亦、御鬘に纏かせる珠を、佐賀美爾迦美て、吹棄つる氣吹の狹霧に成りませる神を、天津日子根命と稱へまつり、又、左の御手に纏かせる珠を、佐賀美爾迦美て、吹棄つる氣吹の狹霧に成りませる神を、活津日子根命と稱へまつり、亦、右の御手に纏かせる珠を、佐賀美爾迦美て、吹棄つる氣吹の狹霧に成りませる神を、熊野久須毘命と稱へまつる。そこで、天照大御神が、建速須佐之男命に、此の後に生れませる五柱男子は、物實が我が物であるから、自、之は、吾が子である。先に生れませる三柱女子は、物實が汝の物であるから、乃、汝の子であると詔せられて、其の區別をお定めになられた」と、記紀、等に載せてある。狹霧神の物實が、高天原の日神の物である五柱男子は、天讓日であるから、天狹霧で、天津神と稱へまつり、天と仰ぐのであり、國より來りたる須佐之男命の物實に依りて生れませる三柱女子は、國禪日であるから、國狹霧で、國津神と稱へて、地と崇むるのである。此の國狹霧の三女神と、天狹霧の五男神との八柱の神が、天と地とで、天の成り、地の定りたる、高天原にして生れませる一神で、即、天祖天讓日天狹霧國禪日國狹霧尊と稱へまつるので、亦名を、神魂・高魂・生魂・足魂・玉留魂・大宮乃賣・大御膳都神・辭代主とも稱へまつるは、人天萬類の御祖にてましますなりとの義で、八神殿に、別に一座を設け給ふと承るところの大直靈神とは、八柱にして一柱なる神にてましますので、一二三四五六七八と稱へて、八上比賣の祕事である。「八上比賣は率て來つれども、嫡妻須世理毘賣を畏

みて、生ウみませる子ミコをば、木の俣キマタノカミに刺し挟ミんで返られてしまつた。其の子の名を、木俣神とも御井神とも謂ミしま
す」と傳へてあるのは、「八上比賣」と書くも、八神殿、或は、八神廷と書くも、共に「やかみひめ」なので、
それは、「ひめ」で、日と畫くので、日であつて、日神で、即、天之眞名井で、それは、母胎なので、亦の御名
は、「みるのかみ」で、天池で、極樂水天で、天の水で、地の水で、稜威ミヅとしては天狹霧で、滋潤ミツとしては國狹
霧で、「や」と稱するので、木俣神なのである。「八十神は、大穴牟遲神が、麗はしき壯夫ユソコに蘇ウマレカハつたのを見て、
また欺き、山に入れ、大樹を切り伏せ、矢を茹めて、其の木に打ち立て、其の中に入らしめて、其の冰目ヒメ矢を打
ち離ちて、拷殺ウチコロした。それを、御祖命ハミコトが哭きながら見出し、其の木を拆きて取り出して、此處に居るならば、八
十神に滅されてしまふであらうから、速イソいて、木國キノクニの大屋毘古神オホヤビコノカミの御所に往けと命せられた。すると、八十神が
また、それを知つて、追ひ臻り、矢を刺さうとした時、木俣キマタから漏逃ノガれられた」と、古典に傳へてある「冰目
矢」で、それが、木俣神で、穴である。「木の俣から逃れた」とか、「木の俣に挟んで」とか書いたのは、神話で
あるが、「木俣」とは、弓矢であることを、先の引例にて、察ミするならば、其の弓矢は、高木神の作るところだと
傳へられてあるので、日神ヤカミヒメの産みませる木俣神は、即、天之御中主神の神徳で、高木神にほかならぬのである。
さうして、其の穴とは、天若日子アメワカヒコの逆サカシマに射上げたる矢を、高木神がお取りになつて、其の矢の穴から衝返し
下した」と云ふ穴で、「須佐之男命が、鳴鏑を大野の中に射て、大穴牟遲神に、其の矢を探らしめ、其の野の四方
から火を放たれた時、鼠が來て、内ウチは富良富良ホラホラ、外トは須夫須夫スブスブと云ふから、其處を踏むと、落ち入り隠れられた
間に、火は焼け過ぎて、鳴鏑は鼠が持つて來られた」ところの穴で、穴は即矢である。之を「神」と稱へ、「神
界」と呼ぶので、經タテも無く、緯ヌキも無く、始も無く、終も無いので、零ヒと稱する無である。

零であるところの無は、際無く涯が無いから、人天萬類を化育して、化育せりとも云はず、神魔を判別はしても、偏執することは無い。妖魔も神徳を仰ぎては、妖魔のままに神と化ること、先に述べたるが如くである。其の如くにして、神と化りたる妖魔は、妖魔の實際を知悉して居るから、妖魔を教へ導くことが自在である。此の妖魔が即、神としての軍兵である。「伊邪那岐命が、御佩かせる十拳劔を抜きて、迦具土神の頸を斬られた。その御刀の前に著いた血が、湯津石村に走就きて、石拆神、根拆神、石筒之男神と成られ、御刀の本に著いた血もまた、湯津石村に走就きて、甕速日神、槌速日神、建御雷之男神、亦名、建布都神、亦名、豊布都神と成られ、御刀の手上に集りし血が、手俣から漏出でて、闇淤迦美神、闇御津羽神と成られた。またその、殺され給へる迦具土神の頭には、正鹿山津見神、胸には、淤滕山津見神、腹には、奥山津見神、陰には、闇山津見神、左手には、志藝山津見神、右手には、羽山津見神、左足には、原山津見神、右足には、戸山津見神が生れられた」とか、「伊邪那岐大御神が、伊邪志許米、志許米岐、穢國に到られた爲に、御身之褌をなさるとて、投棄する御杖に成りませる神は、衝立船戸神、御帶には、道之長乳齒神、御裳には、時置師神、御衣には、和豆良比能宇斯能神、御禪には、道俣神、御冠には、飽昨之宇斯能神、左御手の手纏には、奥疎神、奥津那藝佐昆古神、奥津甲斐辨羅神、右御手の手纏には、邊疎神、邊津那藝佐昆古神、邊津甲斐辨羅神が成られた」とか、「速須佐之男命は、命さしたまへる國をば知らさずして、八拳須が心前に至るまでになられても、啼き騒がれて、青山をも泣き枯し、海河をも泣き乾してしまはれたので、惡神の音、狭蠅の如く充滿し、萬の物の妖が、悉發つた。そこで、伊邪那岐大御神が、速須佐之男命に、どうして汝は、依さしたまへる國をば治らさずして、哭き騒ぐのかと詔せられた。すると、僕は、妣國根之堅洲國に罷らんと欲ふが故に、哭くのであると答へられた。で、伊邪

那岐大御神は、大忿怒イタクイカラれて、然らば、汝イマシは、此の國には住むなと命せられて、神夜良比爾夜良比賜カムヤラヒニヤラハセられた」と、古典には記してある。之等の成りませる神神とは、汚穢醜惡の產物で、換言すれば、妖魔群である。此のやうな妖魔群團を主宰し統轄したまふは、神產巢日御祖神カミムスヒミヤノカミと稱へまつりて、人天萬類の御祖神にてましますのである。其の事を、古事記に記して、「爾ココに、八十神ヤソカミ怒りて、大穴牟遲神オホナムチノカミを殺さんと、相共に議りて、伯伎國の手間テマの山本に至り、大穴牟遲神に云はるるには、赤猪が、此の山に居るから、私どもが、それを追下したならば、汝イマシは、下に待つて居て捕へよ。若も、取らなかつたならば、必、汝イマシを殺すであらうと云ひ、猪に似た大石を、赤く焼いて轉ばし落した。それを、大穴牟遲神が、追ひ下つて取る時、其の石に焼かれて死ミウセられた。其の母なる神が、哭き患ひて、天アメに参り上り、神產巢日之命カミムスヒノミコトにお願い請マラした。神產巢日之命は、蚶貝比賣キサガヒヒメと蛤貝比賣ウムギヒメとお遣はしになり、作活ツクリイカさせられた。蚶貝比賣が岐佐宜焦キサゲコガシし、蛤貝比賣は、水を持ちて、母オモの乳汁チシルと合せて塗られた。すると、一たん死ミウセられた大穴牟遲神が、麗ウルはしき壯夫ヲノコに成つて、出で遊行アルかれた」とある。

如斯く、神產巢日御祖命カミムスヒミヤノミコトは、作り活ツクす神である。作り活ツクかす爲には、種種イロイロの材料が必要なので、其の材料を得るのは、破壊である。神產巢日之命カミムスヒノミコトの作り活ツクす神德に對して、殺し奪ふ破壊の神德を司らるるのは、高木神タカキノカミにてまします。古事記には、「葦原中國を平定する爲に遣はされた天若日子アメワカヒコが、八年にもなるのに復カヘリゴトヲマヲ奏ナキさぬ。鳴ナキ女メが使者ツカヒとなつて、それを詰問した。天佐具賣アメノサグメが、其の聲を聞き、天若日子アメワカヒコに、此の鳥の鳴音ナクコエが、ひどく悪いから、射殺されたが可いでせうとお進めまをすと、天若日子アメワカヒコは、天神から賜はられた天之波士弓アメノハジユミ天之加久矢アメノカクヤを持ちて、天神の使者を射殺された。其の矢ヤが、鳴女ナキメの胸を通り、逆に射上げて、天安河の河原に坐す天照大御神・高木神タカキノカミの御所に逮んだ。是コの高木神タカキノカミとは、高御產巢日神タカミムスヒノカミの別名である。其の高木神タカキノカミが、天若日子アメワカヒコの射放たれた矢ヤを

176
如是の祕事を、古典には、「天鈿女の神挂り」と書いてある。

「天鈿女とは、天宇受賣と古事記の記したやうに、アメノウズメで、その音義は、産出者であり、被産出者であり、多幸多福、天地の幸を集めて匂ひ香へる「火處」^{ホド}で、坤道耦生の神魔であると教ふるのである。別の詞では、之を「宇氣」^{ウケ}と呼ぶ。それは、「宇氣火」^{ウケヒ}して必御子を生むべし」と古典の傳へたところで、身境不二の意に於て、神子産出の胎でもあり、産出せられたる神子でもあるのである。」

あめつちの、はるをあつめて、にほふらむ。かみのよながら、かみかかりして。

此の意味での「かみかかり」と白すのは、人間身として成し得るかぎり、至高至大、深遠幽玄微妙の極致だとの義で、神業に等しいと云ふのである。

その一例は、「人として人を作る」のであり、また、「人を殺す」のであるからとて、古典には、「アメノウズメ」を挙げ、次には、「ヒラブガヒ」を挙げたのである。ヒラブガヒとは、^{サダヒコノオホカミ}猿田彦大神を喰ひ殺して海底に引き入れた魔神の名で、一夜にして神人萬有の在る限りを喰ひ殺すと云はれる地底の司神である。則、黄泉大神の神業で、「破壊」そのもので、戦亂平定の主力と成る軍神の別名である。それで、此の「アメノウズメ」と「ヒラブガヒ」とは、生殺與奪の神權者で、「スリカタメナスナルアマノヌホコ」の神業に負はせ給へる神名である。

アウウ。アルバ。アルバ。云云。の祕言百八十。

2018.1.8.(火)

NO.

DATE

幸255頁 2行目~5行目

(イグキのサギリ) 素材「^ヒ零」もしくは「^ウ」

「ホド」もしくは「^ウケ」 → 身境不ニ「^ミ身」と「^{ミカミ}境(境地)」

境地とは「神子産出の胎」産出者

身とは「産出せられたる神子」

「^ウケヒ」は神子産出の^{プロセス}過程に対する名称

即ち「^ウケヒして必ず御子を生まべし」

^{カミノ}神子 (新たなヒノカミ、被産出者)

(例)

天照皇
大御神

↓
天照
大御神

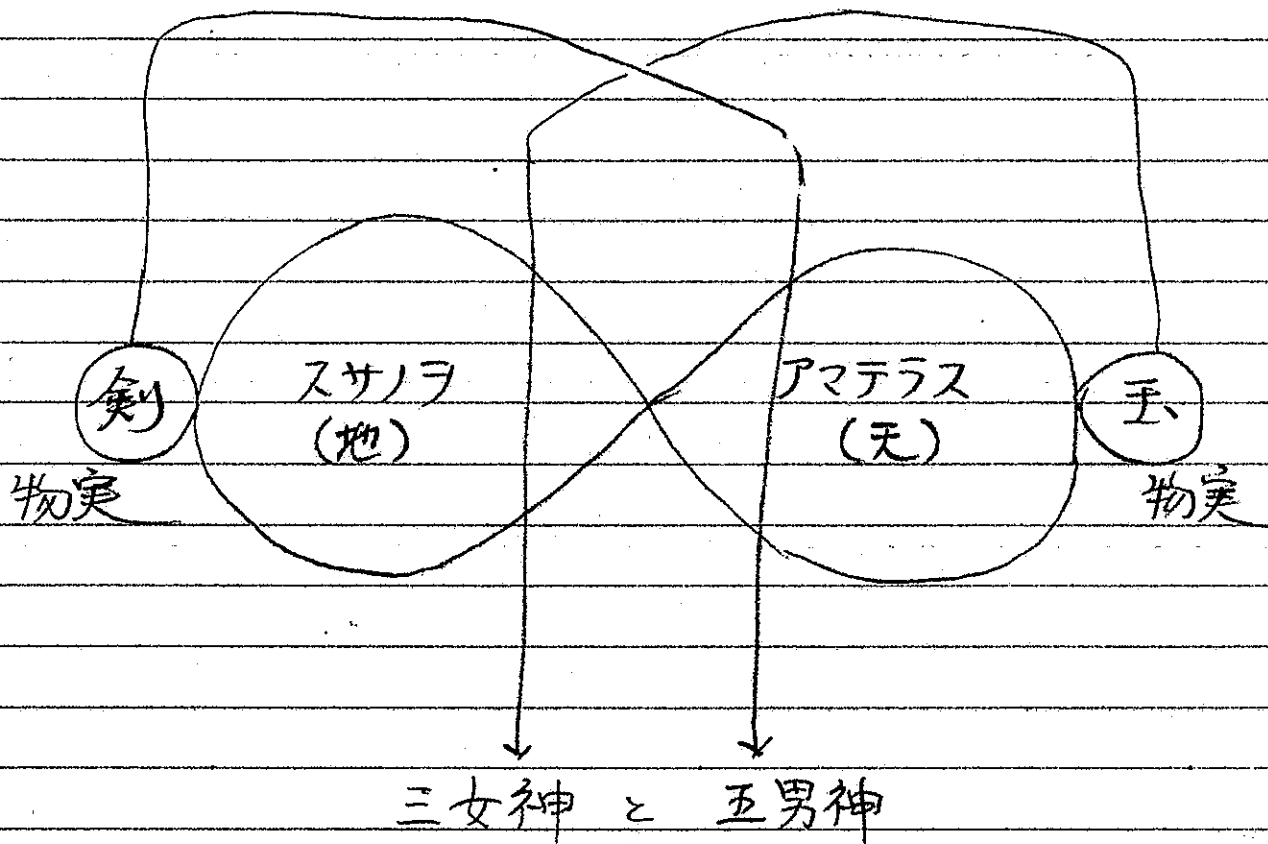
根本資料たる「ヒ」(イグキのサギリ)から

新たなヒノカミを産み成す過程がウケヒであり

それを司るのがアマノウズメである。

無宇宙におけるウケヒ (一例)

(イヅキのサザリ)



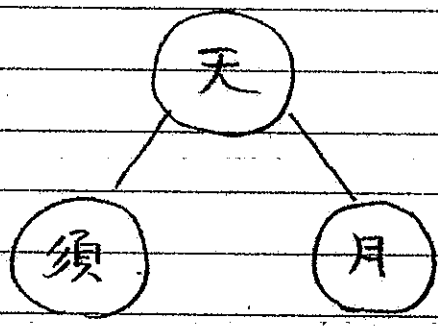
こうした一連の過程^{プロセス}もまた「アメノウズメ」なので、

この「相対形」におけるスサノヲと、多田雄三は

「アメノウズメノミコトとしての、天照大御神(の一部)」と表現している。

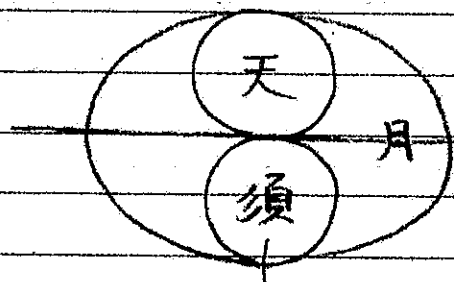
1. 基本形

未来250頁



2. 相対形

うけと の 形



(横倒しに表現しても
内容は同じ)

→ (アメリウズメノミコトとしての天照大御神)

3. 流し形

右目

左目

(高木神)



コト
アマ
ツカミ
の
領域

宇 (極大極小の零)

ミタマ
御霊に対応

(「本質」を損なわない形で
「そのままに」組み直す)

アマ
ツカミ
の
領域

ウケヒ
宇気比 (最大最小の神界)

ミタマ
御魂に対応
(直日)

カミナガラ (→神、治らすなり)
(上に同じ)

無宇宙

クニ
ツカミ
の
領域

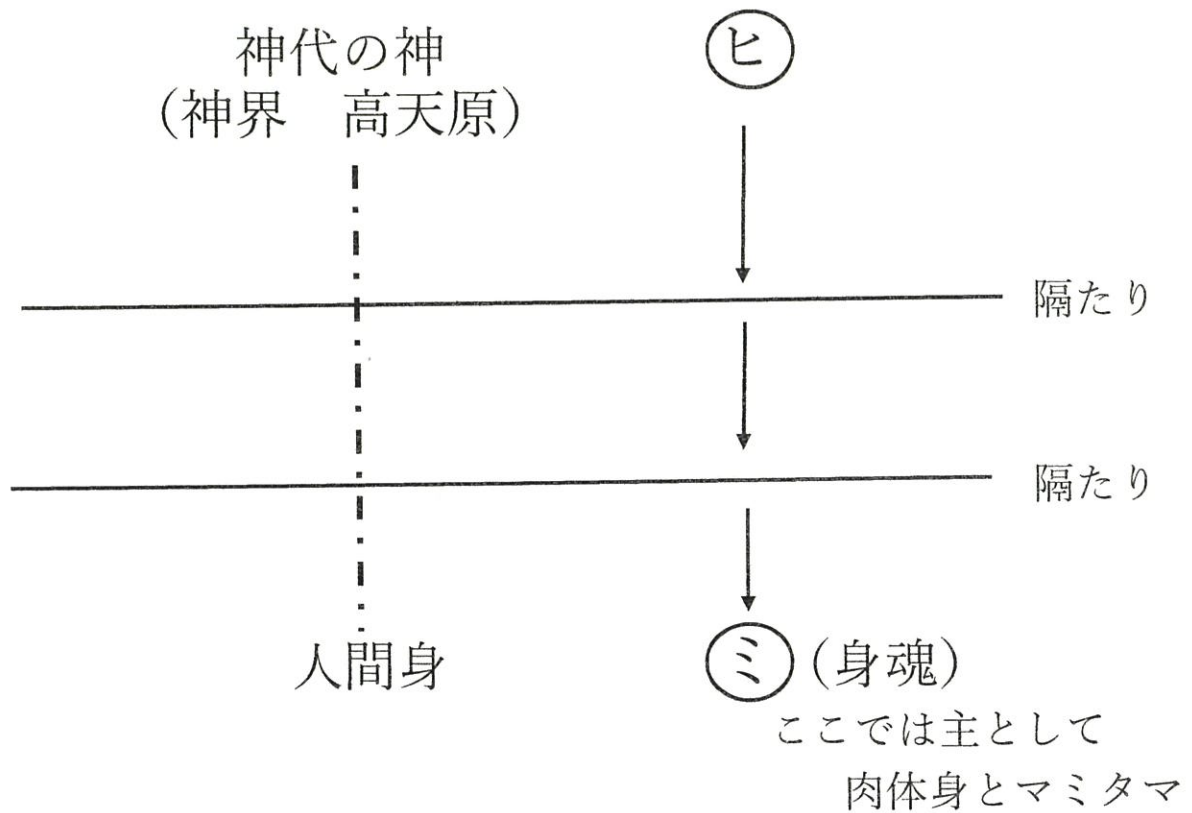
ウケビ
宇気毘 (これによって常人も
直日の人となる)

ミタマ
身魂に対応

宇宙

そのための具体的行為を指して
「宇気踏ミタレバ」と言う

→「ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ」
このように物事が完成されてゆく。
さまを賛美して二十一秘言をのる



隔たりを取り払って考えれば

人間神もまたヒノカミに直結している

(生死一貫 顕幽一途)

逆に言えば日神 (中心) の  のミヒカリが

「今ここ」にさしとおって

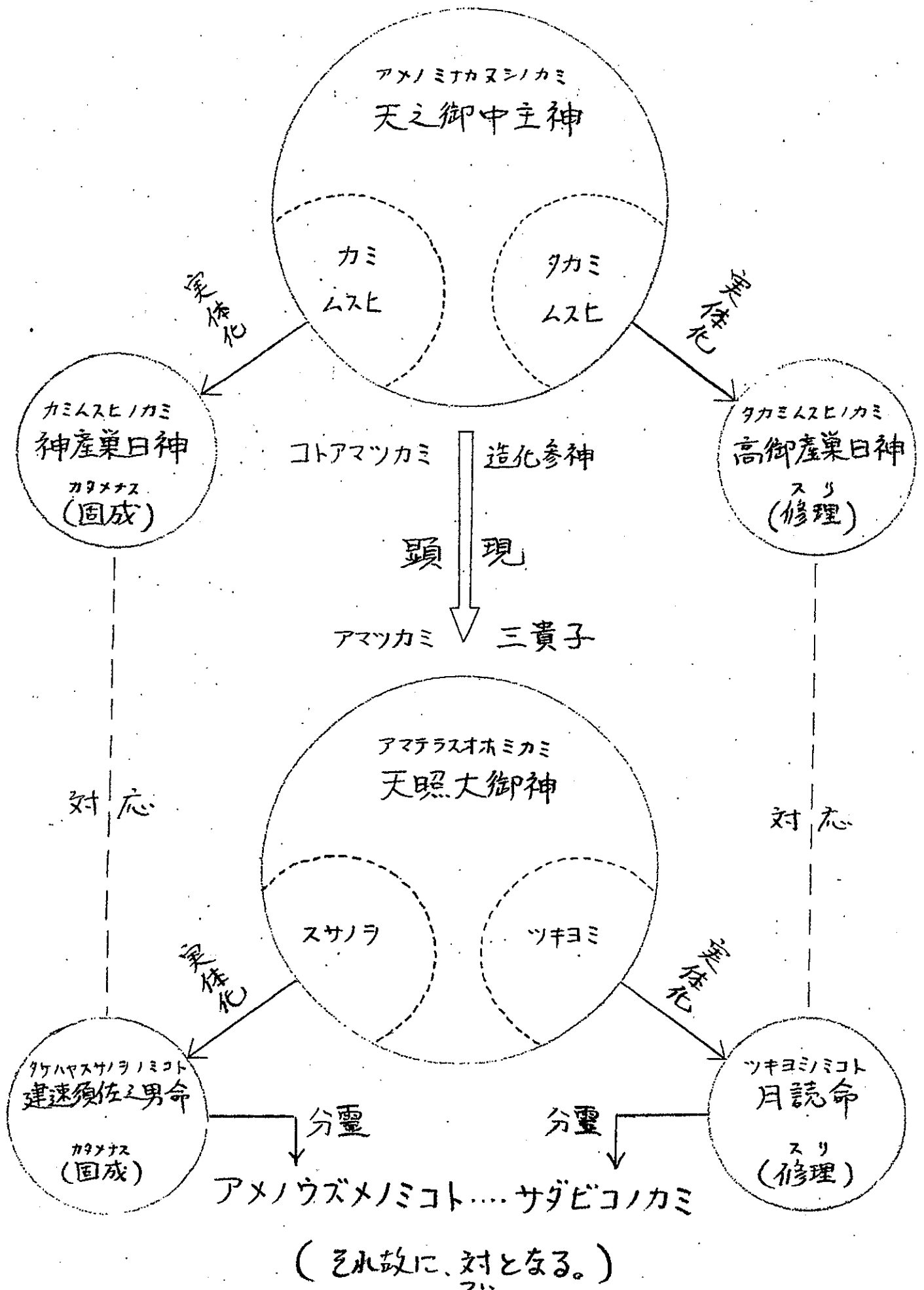
「今ここ」もまた高天原の一部であると解るようになる

→そうすれば、産土神が神産巢日神のウツシオミで

鎮守神が高御産巢日神のウツシオミである

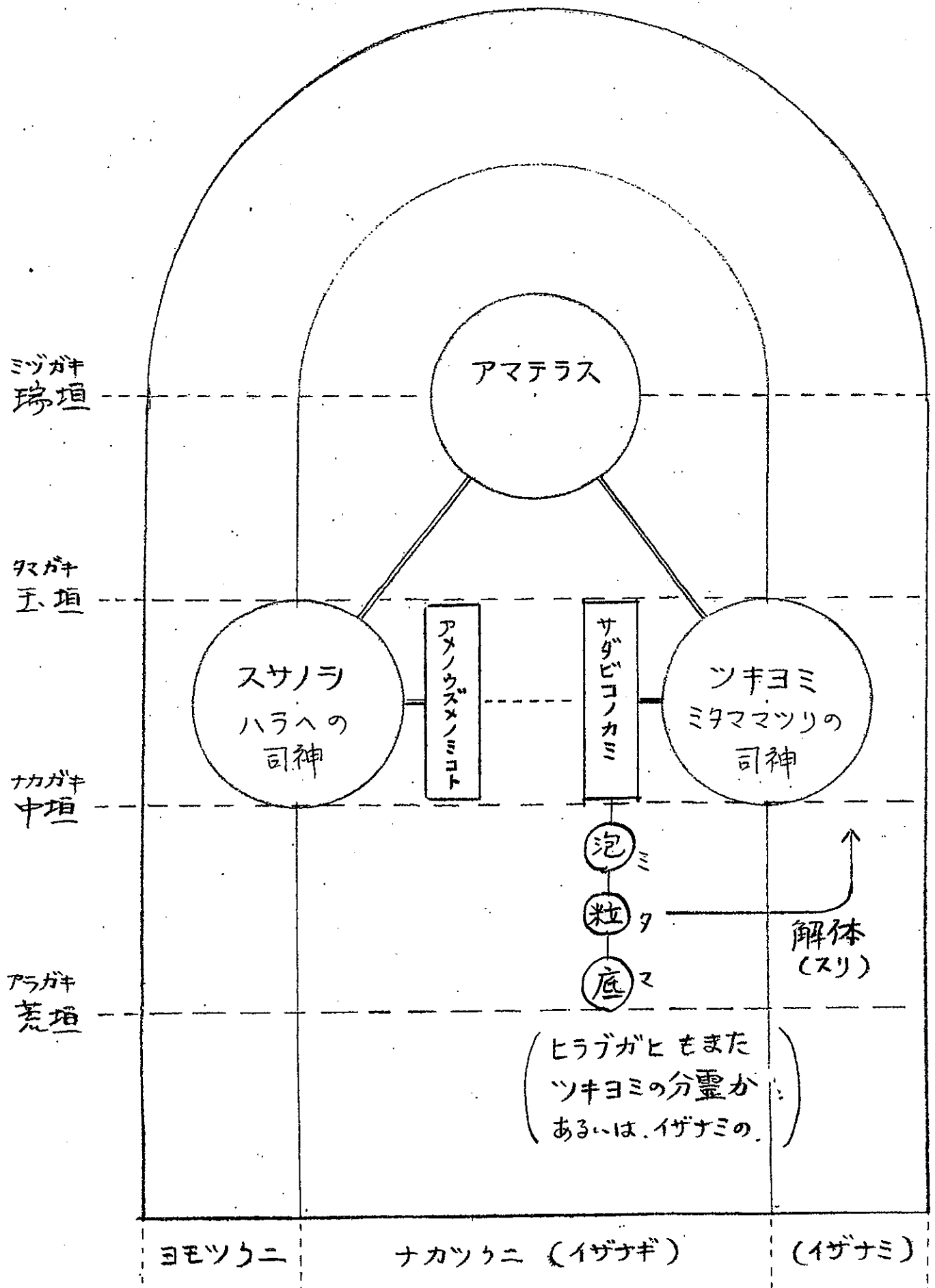
と解るようになる

付図1：アマツカミとしての基本形



付図4：ミコトとしての基本形

(アメノウズメノミコトとサダビコノカミの関係について)

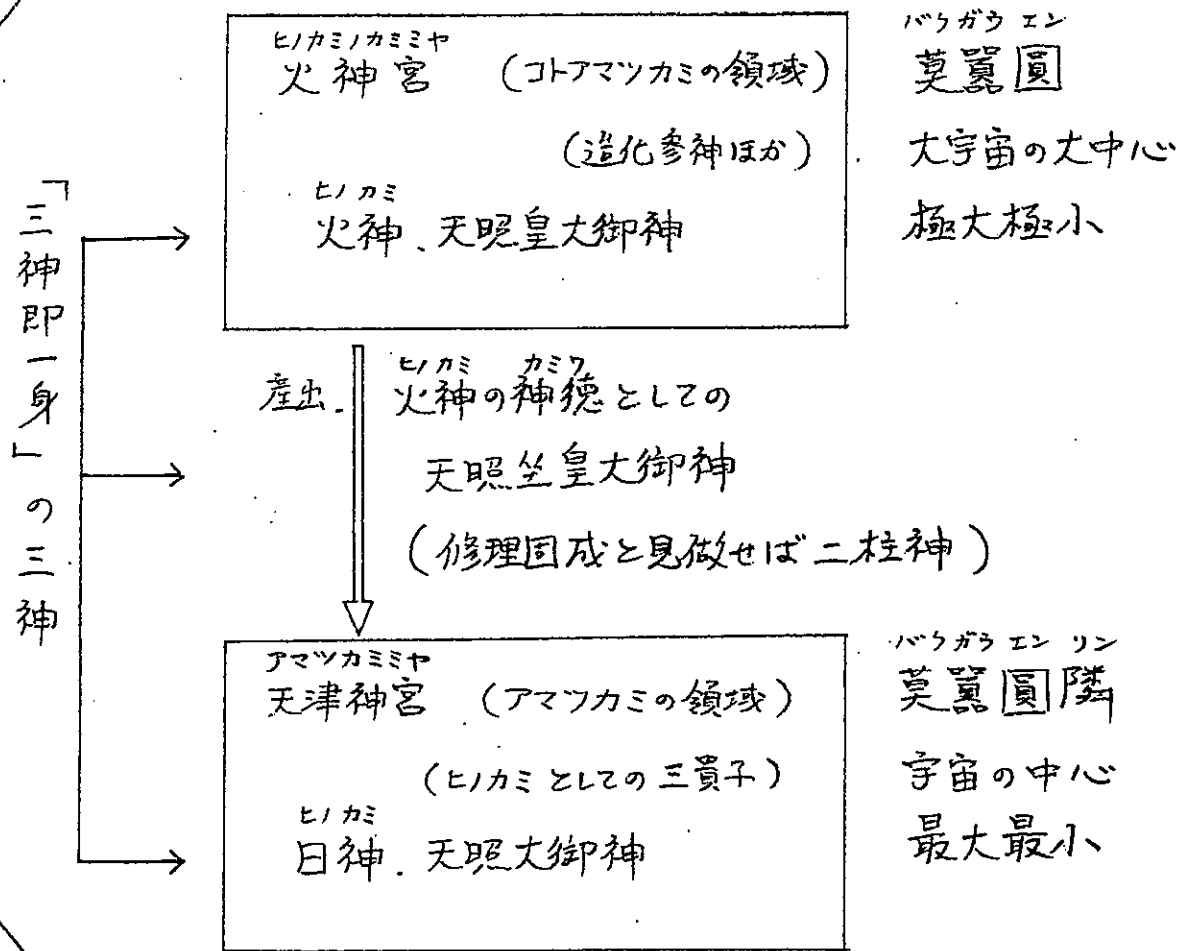


基本図D. 無宇宙の内部構造

(教本 2-1-4. 秘稿『日本天皇国』の解説. より)

この図、全体が無宇宙である。

(図表 1: 高天原の中核部分)



天照皇大神

多田山公秘稿

常陸風土記に「祖神尊」とあり。

今時の學者中には、祖國と並べて祖神と云つてあるのは祖先の國と祖先の神と云ふが如くでもある。

歴史的には、祖先の國と云へば民族として建設し經營したのであり、祖神とは民族として當初奉祀信仰した神を指すのである。

けれども、それは私有したる神と云ふに等しいから偏執固陋の見であり、荊棘細徑、大道を没却せるものである。

日本の古典には、伊耶那岐命伊耶那美命二柱神・天祖天護日天狹霧國禪日國狹霧尊・天祖・陰陽・天地・天津神國饒神・天神諸命・尊・天饒國饒天忍穗耳命・天津神籬天津磐境・高天原千木高知底津磐根宮柱太敷坐・修理固成・等と記載し、現今使用の言語としては目・女・

陰・凹・芽・等が存つて「ミオヤノカミ」の義を傳へて居る。茲に云はんとする祖神とは、「ミオヤノカミ」なる日本語に充當したのである。

「ミオヤノカミ」とは、身・實・稔・充實・三・産出・産靈・胎兒・にして神魔同凡の體なり用なるのであるから、日止であり火人であり人であるのである。

日本書紀に「天地未生之時。譬猶海上浮雪無所根係。其中生一物。如葦牙之初生壘中也。便化爲人號國常立尊」と記したる「人」とは則「女・陰・凹」で凹と支那人の傳へたる「フ・二・經・最小」なのである。

之れを象形的に指示したのが「人」の字で、之れは人身相續の象徴なので、陰陽合体の義である。

「ミナノガハ」「ミナセガハ」の語が有つて現今も地名とされて居る。

水無瀬川・女男川・の如きがそれである。

水でない水・河でない河・水無野川・美那能賀和・女陰・母胎・高天原と傳へて「アマノカハ」「アマノカハラ」「アマノヤスカハ」「ヤスノカハラ」などと傳へて「タカマノハラ」で白玉光底泉聲潺湲とは「アマノカハラ」の「カミカカリ」で、「あちめあうを」と傳へてある。

「アマノカハラ」とは天照大御神の鎮坐するところであることを古事記に「爾其矢（かれそのやは）。自雄胸通而（きぎしのむねをとほりて）。逆射上遠坐天安河之河原天照大御神高木神之御所（さかしまにいあげたれば、あまのかはらにまします、あまてらすおほみかみ、たかきのかみのみもとにいたりたり）」とあるが如く、天照大御神の國土で高天原であるから「賜天照大御神而詔之。汝命者所知高天原」と古事記に載せたのと對照すれば「タカマノハラ」が「天安河（アマノヤスカハ）」で天照大御神の統治したまふところであることは明瞭で「メ・陰・女・陽・芽・目・凹・孔・穴」で「天照皇大御神」と称へまつる「宇・宇・宇・宇・宇・斗・宇斗・宇」で母胎で天安河・天

古事記に「爾天神之命以（かれあまつかみのみこともちて）。布斗麻邇爾ト相而詔之（ふとまににうらへて、みことおのりしたまはく）。因女先言而不良（をみなさちだちしによりて、ふさはざりしなり）。」とある。

ここに「天神之命（あまつかみのみこと）」とあるので天神の神勅と云ふ意味だが、天津神の命であるから國津神ではない。國津神とは尊なので宇宙の主である。

之れを基督とは西部亞細亞地方の傳へで、日本にては「神人・神聖・人・伊耶那岐命伊耶那美命二柱神・日本天皇」にてましますから、天照大御神とは稱へまつらずして等しく大日靈貴尊と曰しまつるのである。

神にてましますも其の御名を異にしたまふが故に御名もまた異なるのである。